

Steins;Gate
シュタインズ・ゲート

哀心迷図のバベル

原作:5pb.×ニトロプラス
著:明時士栄

ドラゴンブック


Steins;Gate
シュタインズ・ゲート
哀心迷図のバベル
原作:5pb.×ニトロプラス
著:明時士栄
ドラゴンブック


Steins;Gate
シュタインズ・ゲート
哀心迷図のバベル


Steins;Gate
シュタインズ・ゲート
哀心迷図のバベル

STEINS;GATE—シュタインズ・ゲート—

哀心迷図のバベル

原作：5pb.×ニトロプラス

著：明時士栄

富士見ドラゴンブック

口絵イラスト：huke／成家慎一郎
本文イラスト：成家慎一郎

目次

——それは、未来へのタイムトラベル。

電話レンジでは、できなかったこと。

そして、誰(だれ)もができること。

伝えられなかった言葉は、いつか、未来へと届くんだろうか——

chapter 1

1

八月十五日、十時三十二分。
本日も、憎(にく)たらしいほどの快晴。
まだ午前中であるにもかかわらず、窓の外の日射(ひざ)しはすこぶる強烈(きょうれつ)で、空調の行き届いたホテルの室内にいながら私は、外のうだるような暑さを想像して、早くも辟易(へきえき)とした気分にさせられていた。
正直、冷房(れいぼう)がガンガン効いた室内で、一日中、専門書を読み漁(あさ)っていたいけれど、そういうわけにもいかない。
私はベッドの脇(わき)に置いておいたケータイを手に取って操作。通話ボタンを押して耳に当て、呼び出し音を聞きながら、鏡の前に移動する。
そこに映る、自分の姿。
シワのない白いシャツに、ホットパンツ。緩(ゆる)く締(し)めた赤いネクタイと、シャツの上から羽織ったベージュの改造制服を調(ととの)えて。長く伸(の)びた赤茶色の髪(かみ)に小さな撥(は)ねを見つけて手で直し、まだ少しだけ眠(ねむ)そうな顔を

しているのに気がついて、ギュッと強めに目をつぶる。パチッと見開いた目に強い意志が宿った気がして、私は満足げに、鏡の中の自分に向かって頷(うなず)いた。

それから、鏡に映る耳に当てたままのケータイを見つめた。

「……あいつ、今日も電話に出ない気？」

さっきからずっと呼び出し音が鳴りっぱなしで、通話が繋(つな)がる気配がない。私は小さく息を吐(は)いて、終話ボタンを押した。

あいつと連絡(れんらく)がつかなくなって、今日で二日になる。何度電話しても、メールしても反応を返してくれない。いったいどういうつもりなの？

傍(かたわ)らのテーブルには一通の封筒(ふうとう)と、その中に入っていた手紙。〝牧瀬紅莉栖(まきせくりす)　様〟という封筒の宛名(あてな)──私の名前──と、〝招待状〟、〝七月二十八日〟という手紙の文面が目に入る。

あれからもう二週間以上経(た)つんだ……。本当なら、私はもうアメリカに帰ってなくちゃいけない。向こうには、次の研究が待ってるはずだし。

けれど、今はまだ帰れない。少なくとも、あいつの話をちゃんと聞かせてもらわないことには。

「このままじゃ埒(らち)が明かない、か」

もう一度、窓の向こうに目を向ける。

嫌になるくらいの日射し。今日の最高気温は何度だろう。熱中症には気をつけないと。そんなことを考えながら、私は部屋の出口に向かって、足を踏み出した。

「岡部、あんた今、どこにいるの……？」

私が岡部倫太郎と出会ったのは、七月二十八日のことになる。

この秋葉原で開かれた、ATF――アキハバラ・テクノ・フォーラムというセミナーでのことだった。

岡部は近くの大学に通う大学生で、セミナーの受講者として。そして私はセミナーの講師として、ATFに参加していた。

私は、年齢こそ岡部よりも一つ年下で、日本ならまだ高校に通っているべき学年だ。けれど、自慢じゃないけど、私はすでにアメリカの大学を飛び級で卒業しており、今は脳科学研究所に研究員として所属している身である。この歳にして著名な学術誌に論文が掲載されるという名誉も受けており、ATFの講師についても、ちゃんとした仕事の依頼を受けて、遥々アメリカからやってきたのである。

……もっとも、論文に関しては、私一人の力で成し遂げた研究成果というわけでもない。あくまでも研究に携わった人間の代表として、論文を書かせてもらっただけだ。それを私の手柄だと言うつもりはない。

それはともかく、その講師として訪(おとず)れたATFの会場で、セミナーが始まる前に私は岡部と出会ったのだ。

長身に羽織った白衣が印象的。ぼさぼさの髪に、無精(ぶしょう)ヒゲも相まって、だらしない男性だというのが、私の第一印象。

彼は、ATF会場で私の姿を見つけるや否(いな)や、その顔に驚愕(きょうがく)の表情を浮(う)かばせて、わけの分からないことを言いながら執拗(しつよう)に私に絡(から)んできた。

ラジ館で確かに見たとか、本当に生きているのかとかそんなことを大声で張り上げながら、自慢の髪を触(さわ)られて、頬(ほお)をつつかれて、挙句の果てには服を剥(は)ぎ取られそうになったのだ。

間もなくセミナーが始まったため、うやむやにしてしまったのだけれど、思い返すだけでも腹が立つ。岡部の働いたセクハラ以上犯罪未満の暴挙に、私は最悪の印象を抱(いだ)いたと言わざるをえない。

そういえば、あのとき岡部は、私に〝鳳凰院凶真(ほうおういんきょうま)〟と名乗ったんだったっけ。

いわゆる厨二病(ちゅうにびょう)というやつである。

厨二病っていうのは、中学二年生が発症(はっしょう)するから〝中二〟病なのであって、大学生が、公共の場で、しかも初対面の相手に向かって設定を披露(ひろう)するのは、いかがなものであろうか。問うまでもなく、答えは論外だ。

他にも、私のことは〝助手〟だの〝クリスティーナ〟だの〝蘇りし者〟だの好き放題に呼ぶし、傍若無人だし、誇大妄想激しいし……とにかく痛々しくて、手の焼ける男。それが岡部倫太郎なのである。

ホテルを出た私は、今、そんな岡部が活動の拠点としている〝未来ガジェット研究所〟に向かっていた。

秋葉原の外れの方にある雑居ビル。その二階に居をかまえるこの場所――通称〝ラボ〟は、研究所の名こそ冠してはいるけれど、その実態は、大学生の作ったちょっと風変わりなサークルである。

岡部の幼馴染である女子高生、椎名まゆりや、岡部の同級生で極度のHENTAIである橋田至。他にも何人かの近しい人間たちが集まった、居心地のいい空間。それが未来ガジェット研究所。

私もATFでの出会いが縁で、ラボの一員――通称ラボメンに加わることになったのだ。

ビルの脇にある階段から二階に上がって、ラボに入るべくドアノブを回してみるも、鍵がかかっていて扉は開かない。……誰もいないのかしら。

誰かしらいれば、鍵は開いてるはず。それでももしかして、と考えて、以前教えてもらった隠し場所から鍵を探り出して、私はラボの中に入ってみることにした。

ドアを開けると、室内からサウナのような熱気が押し寄せてきて、思わず顔をしかめてしまう。

「……やっぱり、誰もいないか」

室内に視線を巡らせて、それからすぐに換気をするべく窓を開け放つ。けれど、外も負けず劣らずの灼熱地獄で、風もなし。室内にこもった熱気は、どうにもならなかった。

「まったく、気が滅入るわね……」
額の汗を拭って悪態をつきつつ、改めて無人のラボの様子を見回してみる。……誰もいないせいか、なんだか妙にラボが広く感じる。
夏休み期間中である今が特別なんだろうけど、ラボにはいつも人がいるっていうイメージが強かったから。無人のラボっていうのは、ちょっとだけ違和感がある。
まあ、そのいつもいるまゆりと橋田からは、今日は来ないって連絡もらってたんだけど。でも岡部からは、なにも聞かされてない。
「ノド渇いた」
あまりの暑さに耐えかねて、設えられた冷蔵庫からドクペを取り出す。ひんやりとした感触が、火照った身体にはなんとも気持ちいい。
「岡部は、どこをほっつき歩いてるのよ」
三人がけのソファに座って、ドクペを一気にノドに流し込む。薬品染みた独特の風味が、清涼感を伴って全身に行き渡っていく。
うん、生き返る。
日本では苦手な人が多いらしいけれど、アメリカ暮らしの長い私にとっては、ドクペは慣れ親しんだ味わいである。
「……ふぅ」

一息ついたところで、ラボに一人きりの自分を、客観的に観察してみる。
ラボに通い始めて二週間。なんだか今では、ここが我が家であるかのように、すっかり寛(くつろ)いでしまっている。

ここって、居心地がいいのよね。ラボで岡部たちと過ごす時間は、本当に楽しい。

そう、私が所属しているアメリカの研究所とは大違(おおちが)い。あそこには研究に打ち込むことによって得られる充足(じゅうそく)感はあっても、寛ぎや安らぎといった類(たぐい)のものは、皆無(かいむ)だ。

いつもギスギスしてて、殺伐(さつばつ)としてて。相手の足をいかに引っ張るか、そんなことばかり考えているような人たちの集まりだ。そんな場所が、楽しいはずもない。……職場に楽しさを求めるのは、ちょっと違うかもしれないけれど。

でも、職場に限らず、そういう仲間たちと過ごすための場所を、私が持っていなかったのは間違いない。
だから私にとって、ラボで過ごす時間はとても新鮮(しんせん)で、とても貴重なものだ。

理論はむちゃくちゃだけど、意欲(いよく)をもって挑(いど)みかかってくる岡部との議論は、張り合いがある。

同性のまゆりは、ふわふわしてて、いつも笑顔(えがお)で、本当に可愛(かわい)い子。同世代で初めてできた、私のかけがえのない友達。

橋田のＨＥＮＴＡＩっぷりは頭が痛いけれど、彼の持つ知識や技術には私の知らないものも多くて、傍(はた)から見ていてとても興味を惹(ひ)かれた。

他にも、まゆりの友達の漆原(うるしばら)さんや、桐生(きりゅう)さん。雑居ビル一階のお店でアルバイトをしていた阿万音(あまね)さん。このラボで過ごしたことで、私は多くの人と知り合うことができた。

アメリカには仕事があるし、いずれ戻(もど)らなくちゃいけないのは事実。けれど、同じ年頃(としごろ)の友達と過ごすこの幸せな時間が永遠に続いたらいいのにな、と願うことは、決して許されないことではないはずだ。

けれど、この幸せな時間は、もうすぐ終わりを迎(むか)える。

もうじき私がアメリカに帰らなくちゃいけないから、ということではない。

私以外のラボメンたちも悲しむべき事態が、引き起こされる。

――もうすぐ、まゆりが死ぬ。

あの笑顔を絶やさないキュートな少女が、死んでしまう。そう言ったのは、岡部。

岡部によれば、まゆりは八月十七日――つまりは二日後に、死ぬことになるという。

それはまるで悪質な冗談(じょうだん)。冗談でなかったとしても、そんな誰(だれ)も幸せにしない未来予知を、誰が信じるだろう。

けれど岡部は、それを冗談でもなければ予知でもなく、自身の体験に基づいた事実であると明かしたのだ。

「…………」

私はソファから立ち上がって、カーテンで仕切られたラボの奥側へと足を踏み入れる。そこは寛ぎの空間となっている手前側の様子とは一転。無骨な棚(たな)に作業テーブル、そして様々な機械が所狭(ところせま)しと並べら

れていた。
カーテンから奥は、開発室だ。ここも研究所を名乗る以上、ただの憩いの場というわけでもない。
棚に並んでいるのは、掃除機とドライヤーを繋げたものだとか、球状に結合されたブラウン管だとか、正直、用途の分からない機械ばかり。これらは〝未来ガジェット〟と呼ばれている、岡部たちによる発明品。
そう、未来ガジェット研究所は、新たな発明品を生み出すことを主目的としたサークルなのである。
そして彼らの生み出した発明品の一つに、〝電話レンジ（仮）〟がある。確か、未来ガジェットの八号機。
作業テーブルの下。そこに、なぜかクッションの上に鎮座している業務用の電子レンジが置かれている。フタは取り払われてしまっているため、物を温めるという本来の用途では、もう使うことができない。
このフタのない電子レンジは、一台のケータイと接続されていて、外出先からでもケータイを介して操作ができるようになっている。……外出中に電子レンジで物を温めたいシチュエーションというのが私には思いつかないのだけど、そういう野暮な話は、今は脇に置いておく。
本題はそこではない。この電話レンジ（仮）には、「ケータイで電子レンジを操作できる」以外の機能が存在しているのだ。
それは、この未来ガジェットを生み出した岡部たちも、想定していなかった機能。
――物質を、過去へと送り出す機能。
もっと分かりやすい言葉を使うなら、この電話レンジ（仮）は〝タイムマシン〟なのだ。

信じられないけど、これは事実。タイムマシンなんて非科学的なもの、存在するわけがないと私も考えた。でも検証を重ねた結果得られたのは〝この電子レンジとケータイを繋ぎ合わせただけのマシンには、時間を巻き戻す機能が存在している〟という結論だったのだ。

二週間前、初めてラボを訪ねた私は、そこで目にしたこのマシンの謎に、強い好奇心をかきたてられた。そして研究に参加させてもらうべくラボメンとなった私は、岡部たちと共に、このマシンの改良に努めてきたのである。

まず最初に行ったのは、メールを過去に送信できるようにする機能。通称〝Dメール〟。

そして次に着手したのが、データ化した人間の記憶の、過去への転送。記憶だけを時間跳躍させる機能――タイムリープ。

――そう。

岡部は、このタイムリープマシンへと進化した電話レンジ（仮）を使って、八月十七日からタイムリープしてきたのだ。

まゆりが死んでしまう未来を、その手で変えるために――

2

岡部がタイムリープしてきたのは一昨日、八月十三日のことだった。

その日は同時に、タイムリープマシンが完成した日でもある。

前の日からずっと徹夜(てつや)で作業を続けて、ようやく完成したのが正午を過ぎた頃。さすがに疲(つか)れ果てていた私は、ラボのソファに横になって、少しの間休ませてもらっていた。

開発に一区切りがついたことで、ラボには緩(ゆる)んだ空気が流れていたのをよく覚えている。岡部も橋田もどこか気が抜(ぬ)けたような顔をして、思い思いの時間を過ごしていた。さっきまでまゆりもラボにいたのだけど、友達に渡すものがあるからと言って出かけていった。

会話もなく、静かな時間が流れていく。

どのくらい経(た)った頃か。私はまどろんではいたけれど、まだ眠(ねむ)らず意識はあったので、多分一時間も経っていなかったと思う。軽快なメロディが、ラボに響(ひび)き渡った。

「ん……誰からの電話だ？」

聞き覚えのあるそのメロディは、岡部のケータイの着信音。岡部がケータイを取り出して、電話に出る所作を、気配で感じる。

「…………」

電話に出た岡部は、なにも言葉を発さなかった。そのままの状態がしばらく続いていたかと思うと、唐(とう)突(とつ)に、岡部は喘(あえ)ぐような声を発した。

「岡部……？」

なにか様子がおかしいことに気がついて、上体を起こす。ＰＣに向かっていた橋田も、怪訝な表情を岡部に向けている。

岡部はうつむいて、ぜぃぜぃと荒い呼吸を繰り返す。そして上げられた顔には――初めて見る岡部の表情があった。

――憔悴。

その一言で言い表していいのかどうかは分からない。そこには苦痛や悲哀、そして強い決意。いくつもの感情が、積み重なっているようにも見える。

まるで老人のような顔。

深いしわが刻み込まれていたわけでもないのに、私は岡部の顔を見て、そんな感想を抱いた。波乱に満ちた人生を送った人間が、表情だけでその生き様を語っているような……そんな顔だった。

「……まゆりはどうした？」

ラボの中を見回して。そこにいた私と橋田に、岡部は訊ねてきた。

「え、まゆ氏なら、さっき友達に渡すものがあるからって、出かけていったっしょ？」

橋田のまるまる太った体躯が、岡部のいる方へと窮屈そうに捻られる。

「そうか」

それでいい、と言わんばかりに岡部は頷いている。

——え？

まゆりが出かけていくところは、あんただって見てたはずでしょ？　「気をつけて行ってくるんだぞ」って、声もかけてたはず。

どこかおかしい岡部の様子。

なにも言わずに岡部を観察していた私は、彼が手にしたままのケータイに目を向けた。

……もしかして？

「どしたん、オカリン？」

「お前たちに頼(たの)みがある。どうか俺の話を聞いてほしい」

「…………」

岡部が、私たちに頭を下げたのを見て、私は橋田と目を見合わせた。

岡部が人に頭を下げるだなんて、信じられない。

彼はいつだって偉(えら)そうで、誇大妄想(こだいもうそう)ばかりしている、重度の厨二病患者(ちゅうにびょうかんじゃ)。自らを〝狂気(きょうき)のマッドサイエンティスト〟鳳凰院凶真と名乗り、いるはずもない世界の敵と日夜死闘(しとう)を繰り広げている、そんな痛々しい性格。

人にものを頼むにしたって、いつもの調子ならきっとこんな感じのはずだ。

——フゥーハハハハ！　これより、作戦を次の段階に進める。お前たちは俺の指示に従って動け！

そこまでひどくなかったとしても、こんな素直なものの頼み方なんて、絶対にするような性格じゃないのに。

「いや、マジでどしたん?」

「俺は、タイムリープマシンで、未来からタイムリープしてきた」

「……は?」

　予想されていた言葉が、岡部の口から発された。

「マジで言ってるん?」

「ああ」

「んじゃ、タイムリープマシンの実験に成功したってこと?」

「そういうことになる。タイムリープマシンの性能は、完璧だ」

「待って岡部」

　岡部の話を信じているのか信じていないのか、橋田は曖昧な相槌を打ちながら言葉を交わす。私はソファから立ち上がって、そんな二人のやり取りを遮った。

「タイムリープマシンの実験は行わない。岡部、あんたは私にそう言ったはずよ」

　タイムリープマシンの改良は、私が中心となって行われた。

　私の専攻は脳科学の分野。私は自身の研究成果を応用して、データ化した人間の記憶を電話レンジ(仮)で過去に転送する仕組みを作り上げたのだ。

理論は完璧。でも、マシンの性能なんて、動かしてみるまで分からない。万が一、記憶の転送に失敗するようなことになれば、おそらく対象者は無事では済まない。

それはつまり、タイムリープマシンの性能を確かめるには、人体実験は避けて通れない道であることを意味している。自分の作ったマシンの性能を知りたいのは事実。けれど、人道的には許されるものではない。

タイムリープマシンをどうするか。その決断を私は岡部に託し、そして岡部は、実験は行わないと宣言したのだ。タイムリープマシンは世間に公表し、然るべき研究機関に託す、と。

「そのつもりだった。だが、そうも言ってられなくなった」

岡部の表情が悲痛に歪む。

「……なにがあった？」

「このままでは、まゆりが死んでしまう。頼む、力を貸してくれ。まゆりを救うためには、お前たちの協力が必要なんだ！」

そして語り始めた岡部の話によれば、未来ガジェット研究所は、〝SERN〟──ヨーロッパ原子核共同研究機関によって監視されているのだという。

SERNとは、スイスのジュネーヴ郊外にある、世界最大の粒子加速器を擁する巨大な研究所のことだ。様々な国家が共同で研究を行っており、素粒子研究の分野では世界最先端を行く。

「どうしてSERNが、日本のこんな小さな研究所を監視するわけ？」

「理由は分かっているはずだ。俺たちが、電話レンジ（仮）――いや、タイムリープマシンを生み出してしまったからだ」

「タイムマシン研究の独占が目的、か……」

「そうだ」

　始まりは、ネット掲示板〝＠ちゃんねる〟に現れた、ジョン・タイターを名乗る人物による書き込み。彼は自らを２０３６年からやってきたタイムトラベラーと名乗り、未来では、タイムマシン開発を成功させたSERNによって、ディストピアが築かれることになると、警告を発していた。

　俗にいう、陰謀論。

　あの戦争を起こしたのはどこの組織だ、誰を暗殺したのはある人物の指示によるもの――大きな事件が起これば必ず囁かれる、根拠なしの噂の類。オカルトと言ってしまってもいいかもしれない。

　ジョン・タイターの唱えたそんな陰謀論に興味を示した岡部は、橋田にSERNへのハッキングを指示。そしてあろうことか橋田は、本当にSERNがタイムマシン研究をしているという証拠を見つけ出してしまった。

「それじゃ、SERNがディストピアを築くって話も……」

「事実だ。SERNはタイムマシン研究を独占するために、世界中に情報網を張り巡らせている。その情報網に、俺が送った最初のDメールが捕捉されてしまったんだ」

「それって、僕のケータイに送ってきたアレのこと？」
「そうだ。SERNは間もなく、〝ラウンダー〟という武装組織にラボを襲撃させる。そしてまゆりは、ラウンダーによって殺されてしまうことになる」
そこで岡部は、深いため息をついた。うつむいて、ポツリと、「俺はまゆりが死ぬところを、この目で見てきたんだ」と呟いた。
「…………」
岡部の様子がただごとじゃないのは間違いない。嘘をついているとも思えない。だけど、だからといって無条件に信じるには、岡部の話はあまりに荒唐無稽だ。
橋田と目が合う。彼も困惑していることが、その表情からうかがえる。
「岡部。私もあんたを信じたいとは思う。まゆりを助けるために私たちの力が必要だっていうんだったら、喜んで力を貸す。けれど、その話が真実であると証明することはできる？」
「……お前が今一番欲しいものは、マイフォークである」
「ふぇっ!?」
顔を上げた岡部が放った唐突な言葉に、私は素っ頓狂な声を上げてしまった。
「フォーク？　そうなん、牧瀬氏？」
「な、な、な……」
「マイスプーンはすでに持っている。そうだな？」

誰にも言ったことのない、私の秘密。ま、まさか、未来の私が……？

「ずっと遠くの、別の世界線で、お前から教えてもらった。俺の話を信じてもらうための、合言葉としてな」

「世界線……？」

「俺がタイムリープをしたのは、今回が初めてではない。すでに、何十回も、何百回も、数え切れないくらいタイムリープを繰り返し、Dメールを使って世界線を変えながらここまでやってきた。……ようやく、ここまでたどり着いたんだ」

Dメールには、世界を変える可能性があるのだと、岡部は言った。たかが一通のメールで世界が変わるわけがないと思うかもしれないが、バタフライ効果によって変わってしまうケースは、確かに存在するのだと。

バタフライ効果――北京(ペキン)の蝶(ちょう)が羽ばたくと、ニューヨークで嵐(あらし)が起こる。極(きわ)めて小さな差が、やがては極大の差を生み出す現象のことを指す、カオス理論で用いられる比喩(ひゆ)だ。

「……それってつまり、岡部はすでに何度も、Dメールで世界が変わるところを見てきたってことよね？」

「そうだ」

「私たちにその認識(にんしき)がないのはなぜ？」

「世界線が変わった場合、世界の再構築が行われる。矛盾(むじゅん)が生じないよう、世界の有様も、人間の記憶(きおく)も書き換(か)えられて、帳尻合(ちょうじりあ)わせが行われる。だから誰も、別の世界線のことについては覚えていないんだ」

「だったらどうして、岡部だけがそのことを覚えているの？」

「俺が以前話した、〝運命探知（リーディングシュタイナー）〟の能力によるものだ。俺だけは、世界線を跨（また）いでもすべての記憶を引き継（つ）ぐことができるらしい」

　にわかには、信じがたい話だ。

　けれど、マイフォークの話には信憑性（しんぴょうせい）がある。あれは誰にも話したことのない、私だけの秘密だったのに。

　それに……。

「頼む、俺の話を信じてくれ」

「…………」

　それに、岡部のこの憔悴（しょうすい）しきった表情。

　数え切れないほどのタイムリープをしてきたと言っていた。それはつまり、この数日間を延々とやり直し続けてきたということを意味している。それがどれほど苛酷（かこく）で、果てしない旅路だったのかは、岡部のこの表情が物語っている。

「……分かった、岡部を信じる。それで、どうすればまゆりを助けることができるの？　その組織に襲（おそ）われないように、まゆりを連れて逃（に）げればいいの？」

「いや、それでもまゆりは、必ず死ぬことになる」

「敵に襲われなくても？」

「そうだ。どう動こうとも、最終的には同じ結果が訪（おとず）れる。世界は、そうできているんだ」

つまり、ラウンダーに殺されるからまゆりが死ぬのではない。まゆりの死という結末が決まっているから、ラウンダーに殺される。そういうことらしい。

岡部は、〝アトラクタフィールド理論〟という言葉で、それを説明した。

世界は可能性の数だけ世界線が分岐し、それが寄り集まってできている。その世界線の揺らぎが、アトラクタフィールド。同一のアトラクタフィールド内では、世界線はやがて、同一の結果へと収束することになる。

今いるアトラクタフィールドαでは、必ずＳＥＲＮが築くディストピアという結果、そしてまゆりの死という結果に収束してしまう。

このことを、岡部はジョン・タイターから教えられたのだそうだ。タイムトラベラーである彼によれば、アトラクタフィールド理論は、２０３６年ではスタンダードな理論として認識されているらしい。

「よって、まゆりを救うには、現在のアトラクタフィールドαに属する世界線を脱して、異なるアトラクタフィールドβに属する世界線に到達しなければならない」

「具体的にはどうすればいいん？」

「ＳＥＲＮのデータベースにクラッキングし、ＳＥＲＮに捕捉されてしまった一番最初のＤメールを削除する」

ＳＥＲＮが未来で作り上げるタイムマシンは、私たちのタイムリープマシンが重要なヒントになっているらしい。だから一番最初のＤメールを削除して、ＳＥＲＮの監視から逃れることができれば、ＳＥＲＮはタイ

ムマシンを完成させられなくなる。ディストピアを築けなくなる。そうすることで世界は、異なる可能性、β世界線へと移行する。

「そのためには、IBN5100が必要だった」

SERNのデータベースは、特殊な言語で構築されている。それは現在のPCで使われている言語では解析不能であり、古いPCであるIBN5100で使われている言語でのみ、読み取ることができるという。

岡部がIBN5100を手に入れられる世界線は、ここだけしかなかったらしい。だから岡部は、何度もDメールで世界を変えて、この世界線を目指し続けてきたのだ。

「うん、大体話は分かったお。それじゃ早速、準備始めるわ」

「頼んだぞ、ダル」

神妙な岡部の態度に、橋田は少しだけむず痒そうな顔をした。いつもの岡部なら、ここは〝我が右腕〟だとか〝スーパーハカー〟だとか。そういう言葉を使って橋田を鼓舞したであろう場面。いつもと調子が違うことに違和感を覚えつつも、橋田はグッと親指を立てて、早速作業に取りかかったのだった。

橋田がクラッキングの準備を進めている間、私はさらに詳しく、岡部の話を聞いていた。

Dメールによって歪んでいった世界線のこと。

別の世界線の記憶は、断片的ながら、誰もが持ち合わせているということ。

アトラクタフィールドについて岡部に情報を与えたジョン・タイターの正体が、ラボメンで、八月九日にアキハバラを去った阿万音鈴羽さんであったこと。

そして、孤独な戦いを続ける岡部を支えたのは、いつでも——

「いつも、そうだった。いつだってお前は、そうやって俺の話を聞いてくれた」

岡部を支え続けたのは、いつでも私だったということ。

……当たり前じゃない。あんたが苦しんでるのなんて、見たくないもの。

いつも尊大な態度をしてるくせに、それでいて岡部はいつだって、私たちのことを気にかけてくれていた。

幼馴染だというまゆりのことを、ずっと見守ってきたこともそう。こうして、命の危険が伴うタイムリープを延々と繰り返してまで、まゆりを助けようとしていることもそう。

私がパパについて悩んでいたときだって、岡部は優しい言葉をかけてくれた。

あんたは、仲間想いの優しい男。

岡部がラボメンに誘ってくれたおかげで、私がどれだけ救われたことか……。

「繋ぎ終わったお」

PCとIBN5100をずっといじり続けていた橋田が顔を上げる。

「ちょっと設定いじらないとダメだけど、十分しないうちにクラッキング始められる」

「よし、これでやっと……」
やっと、まゆりを救うことができる。
長い長い旅路の果てに、ようやくたどり着くことのできた目的地。
岡部は安堵の表情を浮かべて、嬉しそうに笑っていた。
「それにしても懐かしいわね。最初のDメールか。それって、ATFで見せてもらったやつのことよね？」
「ああ、そうだ」
ATFで私に絡んできた岡部が、お前にメールを送ったはずだと、同行していた橋田に同意を求めた。
橋田は怪訝な表情で、私たちに一週間前に届いたという奇妙なメールを見せてくれた。
それが最初のDメール。あのメールは元凶だったのかもしれないけれど、私と岡部を出会わせてくれたものでもある。
「あのときのこと、覚えてる？　あんた、人を幽霊呼ばわりして、髪とか顔とか、ベタベタ触ってさ……」
あのときはあまりのことに怒り心頭だったけれど、今ではいい笑い話。私はクスリと笑って、岡部の方を見――
「……そう、か」
ついさっきまで安堵の表情を浮かべていた岡部の顔に、今は、驚愕が張り付いていた。信じられないことに気付いてしまった、といわんばかりの様子で、天井の一点に視線を釘付けにしている。

「岡部……？」
　このとき、岡部になにが起きたのかは分からない。
　岡部は歯を食いしばって全身を震わせて、そしてただ一言でクラッキングの中止を告げると、ラボから姿を消したのだった。

3

　クラッキングの中止から、今日で二日が経つ。
　あれ以来、岡部とは連絡が取れていない。一昨日はもちろんのこと、昨日もラボには姿を現さなかった。
　橋田とは、岡部の様子がおかしいと話し合いもしたけれど、結局、岡部がクラッキングを中止した事情が分からないので、それ以上どうすることもできなかった。
　まゆりは、一度だけ岡部と連絡がついたらしい。今日はラボに来るのかと訊ねたら、「一人にさせてくれ」という返事だけがあったという。まゆりは心配そうに、岡部のことを気にかけている。その様子からすると、まゆりは岡部からなにも聞かされてないようだった。
　……それもそうか。「お前はもうすぐ死ぬ」だなんて、ただの死亡宣告でしかない。そんなもの聞かされたって、まゆりは困るだけだ。
　クラッキングによって問題がすべて解決するのなら、まゆりはこのままなにも知らない方がいい。

「だったら、さっさとクラッキングしてまゆりを安心させてあげればいいのよ」

呆れたようにため息一つついてから、目の前の、ネオン看板がとにかく派手なビルを見上げる。

秋葉原駅前、ラジ館。

あのまま一人でラボにいても、岡部が現れることはないだろうと踏んだ私は、再び炎天下へと足を踏み出して、秋葉原の象徴ともいうべきこの八階建てビルの前までやってきていた。

ビルを見上げて目に付くのは、なんといっても八階から屋上にかけて空いた大穴である。戦争でもあったのかと疑いたくなるようなこの大穴の正体は、七月二十八日、ATFで私も秋葉原を訪れていたその日に、ラジ館に落下した謎の物体によって空けられたものだった。

物体は高さ五メートルほどの円筒形をしていて、見た目はまるで人工衛星。当初はビルに突き刺さったままになっていたのだけど、八月九日の夜に、忽然と姿を消してしまった。

この一連の出来事は、当然のように世間を騒がせ、連日のようにテレビで取り上げられた。人工衛星だとして、どこの国のものなのか、なにを目的としたものなのかと、当初は専門家を招いて熱心な検証が行われていたものの、時間の経過と共に陰謀論の類といった怪しい話題が増え始め、八月九日以降は、もはやオカルト話だらけになってしまった。

彼らにとって、ラジ館に落下した物体の真相など、もはやどうでもいいことなのだろう。当初は真実を求めていたのかもしれない。けれど八月九日に物体そのものが消えてしまったことで、真相は永遠に闇の中となってしまったことを理解しているのだ。だから非現実的な話題へと舵を切った。

多分、彼らのその判断は、正しかったのだと思う。

一昨日、語られた岡部の話によれば、ラジ館に落下した物体の正体は、２０３６年からやってきたタイムトラベラー、ジョン・タイター――すなわち、阿万音さんが乗ってきたタイムマシンだというのだ。

ラジ館に落下した物体の正体が、タイムマシン。そんな非現実的な真相にたどり着くことなんて、誰にもできるはずがない。だから真相究明を諦めた彼らの判断は正しい。

そしてオカルト方面に舵を切ったことで、結果としてグンと真相に近づいている。彼らにその自覚はないのだろうけど。だからその判断もまた、正しいということになる。

「事実は小説よりも奇なり、かしらね」

視線を下ろし、ラジ館の入り口に目を向ける。入り口のシャッターは半開きの状態で、中は薄暗い。あんなことがあったから当然のことなんだろうけど、どうやらラジ館は今、営業を停止しているらしい。

私は周囲の様子を確かめる。ここは駅前だから、人通りが途切れることはない。だけど駅前を行き交う人々の視線は、最初に私がそうしたように、八階の大穴に向けられがちで、入り口にはほとんど注意を向けられてない。

「これなら、あまり目立たずに入れそうね」

人通りが少なくなるタイミングを見計らって、私は半開きのシャッターからラジ館の中へと、素早く滑り込んでいった。

「暑っ……」

予想はしていたけれど、空調の止まっているビル内部は、やはり暑い。ラボなんて比較にならないほどに。それが中に入った最初の感想。

　きっと中は照明もついてなくて真っ暗なんだろうなと思っていたけれど、そんなことよりも、この蒸し風呂のような暑さの方がヤバイ。

「まったく、手が焼けるんだから……！」

　目指すは屋上。暑かろうがなんだろうが、私はそこに行かなくてはならない。覚悟を決めると、私は灼熱地獄の中を一気に突き進んでいった。

　暗闇の中、慎重な足取りで階段を上り続けて、そして前方に鉄扉の間から漏れる光の筋を見つける。ようやく最上段まで上りつめて、右手で顔を拭ってみると、案の定汗まみれ。汗でぺっとりと張り付いた髪の毛が煩わしい。

「これで目論見が外れてたら、骨折り損のなんとやら、ね」

　小さく息を吐いて、目の前のドアノブに手を伸ばす。屋上へと続く鉄扉を開けると眩いばかりの光が屋内に差し込み、火照った身体には心地好い風が吹き込んできた。

　屋上に出て、見渡してみる。

　まず目に入ったのは、タイムマシンが残した大穴。それから、屋上に寝転がって空を見上げている長身の男が一人。

「あ、いたいた」

どうやら骨を折った甲斐（かい）はあったらしいと、安堵のため息を一つ。ゆっくりとした足取りで、長身の男──岡部のそばに近付いていく。

「岡部、こんなところでなにしてる?」

「いや……。よくここが分かったな」

気だるげな声で答えて、岡部が上半身を起き上がらせる。形としては、私に背中を向けた姿勢となり、そのままこちらを見ようともせずに、岡部はそう言った。

今はどんな顔をしてるのだろうと、気にかかる。一昨日は、ひどい顔をしてた。橋田にクラッキングの準備をさせていたときは、少しだけマシな顔に戻（もど）ったけれど、いきなり中止の指示を出してラボを立ち去るときには、また元の表情に戻っていた。

「一人になりたいって言ってたって、まゆりから聞いたから。確率的に見て、ここに一番いそうっていう解を導き出した」

岡部は、ラジ館に現れた物体の正体を知っていた。その話しぶりからして、どうやら事件後のラジ館内部の様子についても精通しているらしかったことから、この解を導き出したのだが、大正解だったらしい。

「だったら一人にさせてくれ……。わざわざ、捜（さが）さなくていい。俺は迷子の子供じゃない」

「な、なによ、せっかく人が心配して捜しに来たのに……」

岡部の態度は、突き放したように素っ気ない。一昨日は、私の力を貸してほしいって言ってたじゃない。だから、あんたを捜しに来たのに。

「私だって、あんたのことなんて放(ほう)っておこうかと思った。ただ、一昨日の岡部、なんか変だったから」

「…………」

岡部はなにも答えようとしない。私を見てもくれない。

「なにがあった？」

「なにも……」

「だったら、なんでSERNへのクラッキングを止めたの？」

まゆりを救うためには、SERNへのクラッキングが必要。そう説明したのは、岡部、あんたなのよ。なのにクラッキングを突然(とつぜん)中止して、その理由も言わずに姿を消しておいて、「なにもない」で通るわけがない。

なにか問題が起こったなら、私に相談してほしい。他(ほか)の世界線の私は、いつだってあんたの話を聞いてきたんでしょ？

「お前だって、クラッキングはよくないと言っていただろう……」

「タイーホフラグが立ってビビったんですね。分かります」

すっきりしない岡部の態度に、私は鼻で笑いながら小馬鹿(こばか)にしたようにそう言ってやる。普段(ふだん)の岡部がそうであるように、こうして挑発(ちょうはつ)することで、岡部が突っかかってくることを期待していたのだけど——

「せめて遵法(じゅんぽう)精神に目覚めたと言ってくれ」

返ってきたのは、なんともしおらしい返答だった。
確かに、常識的であるとは言えるかもしれない。だけど、そうじゃないでしょ？　今、あんたが考えるべきは法律のことなんかじゃない。まゆりのことだ。
「……全然らしくないな」
いつもの決断力はどうしたの？
Dメールの検証を率先して行ったあんたの姿は、私の提示した電話レンジ（仮）改良案を即決したあんたの姿は、どこに行っちゃったの？



こんなところで孤立(こりつ)してうじうじしている岡部なんて、見たくない。いつもの痛々しい厨二病(ちゅうにびょう)全開の岡部の方が、ずっとあんたらしい。

「いつもの独善的な態度はどこ行ったのよ？　狂気(きょうき)のマッドサイエンティスト、鳳凰院凶真のくせに――」

「独善的でなんかいられるか！」

「……っ」

突然、岡部が上げた怒号(どごう)に、私は身を竦(すく)ませる。……過剰(かじょう)に反応してしまったのは、昔から人に怒鳴られるのは苦手だからだ。

「今回ばかりは、独善的じゃいられないんだ……」

岡部が張り上げた怒号は、しかしすぐに小さく小さく萎(しぼ)んでいった。

「仲間のどちらを見殺しにするかって決断を前にして、独善的でいられたら……むしろ、どれだけ楽だっただろうな……」

そして最後には、枯(か)れ果てたような声。

やっぱり、なにかあったんだ。それも致命的(ちめいてき)な問題が。SERNへのクラッキングを行ってはならない理由が、なにかあるのだ。

「どちらかを見殺しって、どういう意味？」

「…………」

chapter 2

1

八月十五日、十五時四分。
ラジ館を飛び出した私は、ラボに向けて中央通りを歩いていた。
岡部によれば、私は近いうちに世界から消えてしまうらしい。
まゆりを助けようと奔走している岡部は、Ｄメールによって過去を改変することで、現在を書き換えていると言っていた。正確には、元の世界へと軌道修正している、って。
それはもう別の世界線の出来事だから、岡部以外の人間には分からないことだけど、私たちは電話レンジ（仮）の検証を行う過程で、いくつものＤメールを過去へと送り、幾度も世界を歪ませてきたらしい。
そしてたどり着いたのは、八月十三日にまゆりが殺される最悪の世界線。岡部の、まゆりを助けるための戦いはそこから始まったのだ。
岡部は、世界を歪ませる原因となったＤメールを、同じ順番で、一つずつ取り消していった。そうして一歩ずつ、元来た道を戻っていき、ようやくの思いでたどり着いたのが、この世界線。

元の世界——β（ベータ）世界線に戻るための鍵（かぎ）、IBN5100がラボに存在する世界線だ。

ようやくここまで来たんだと、岡部は嬉（うれ）しそうに言っていた。この戦いも、もうすぐ終わる。まゆりを助けることができる。あとはIBN5100を使ってSERNへのクラッキングを行いさえすれば、それですべては元に戻るのだと。

けれど、そうして行き着くその先は、私が七月二十八日に死んでいる世界。その世界線では、今こうして生きている私の存在は、矛盾（むじゅん）する。

「……世界が歪んだ結果が、今ここにいる私、か」

だから、岡部の選択（せんたく）によって、私は間もなく世界から排除されることになる。

そういえばいつだったか、岡部にこんなことを言ったことがあったっけ。

私にDメールを送るよう命じた岡部に対して、言った言葉だったと思う。

——過去を変えるのは、卑怯（ひきょう）な感じがする。

今思えば、あれはすごく間抜（まぬ）けな言葉だ。Dメールによる過去改変で生き延びることとなった私が、過去改変に否定的なことを言っていたんだから。結果としては、間接的に自己存在を否定していたことになる。

世界を元の状態に戻すことが、すなわち私の排除へと繫（つな）がるのなら、悔（くや）しいけれど、私にはそれに反論することはできない。岡部じゃないけれど、それが世界の選択、なのだろう。

「……世界から消えるって、いったいどんな感覚なんだろう？」
あとは、岡部が決断してクラッキングを実行すれば、それで私は消えてなくなるはずだ。
岡部には、まゆりのことだけを考えるように言ったけれど……きっと、もうしばらくは決断できずに迷い続けることになるだろう。それに今はまゆりに会いに行ってるはずだし、岡部がクラッキングを実行するのは、もう少し先のことになるのかもしれない。
でも、まゆりを助けるための手段が明確である以上、もう、いつそれが行われてもおかしくはない。
いつ私が消えても、不思議ではないのだ。
それこそ、今、こうしている間に消えてしまっても……。
「………」
足を止め、中央通りを行き交う人の波に視線を投げる。
……私はまだ、存在しているのだろうか？　周りの人たちに、私はちゃんと見えてるのだろうか？
さっき、ラジ館で見たあの光景が脳裡を過ぎる。
岡部の決断で、みんながβ世界線に移動して。私だけが取り残されて。音もなく、光もなく、廃墟のように静まり返った街を、一人で彷徨う。
別の可能性としては、みんなは変わらずそこにいて、私もいるのだけれど、私だけが、認識されなくなる、ということもありえるのかもしれない。
「この景色も、見納めか」

秋葉原に来て二週間。すっかり見慣れた電気街の景色も、私が人生で最後に見ることになるかもしれないものだと思うと、また少し違ったものに見えてくる。

「……うん、ちょっと忘れ物しちゃって～。えっへへー。取りに行ってくるね～」

街の片隅に突っ立って、そうしてぼんやり街並みを見渡していると、聞き覚えのある声が私の耳に届いた。

この声は……まゆり？

視線を道行く人の流れに戻して見回してみると、人波の中に、見覚えのある水色の帽子が揺れているのを見つけることができた。

「お母さんは、先に行ってて～。まゆしぃは後で合流するからー」

秋葉原駅から、ラボのある方角へと移動していく人の流れ。その水色の帽子が私の目の前まで来たとき、人波の間から見えたのは、水色の帽子からはみ出したくしゃくしゃの髪、それから人懐こそうな笑顔。ケータイで話しながら歩く水色のワンピースの少女は、やっぱり椎名まゆりだった。

嘘、今日はラボに来ないって言ってたから、てっきり秋葉原にはいないんだと思ってた。いえ、それよりも、近くに岡部の姿が見当たらない。……一緒じゃないの？

「ま、まゆり！　ねえ、まゆり！」

予期していなかった遭遇に驚いてしまって、反応が少し遅れる。水色のワンピースが再び人波に埋もれ、続いて笑顔が埋もれて、最後に残った水色の帽子までもが私の視界から消えかけたところで、ようや

く我に返った私は、慌(あわ)ててまゆりを追いかけた。

「んー、十五分くらいかなぁ？　……うん、じゃあね」

「ちょっと通して！　通して下さい！　まゆり、こっち！　ねえ聞こえないの⁉」

道行く大勢の人々に遮(さえぎ)られて、思うように前に進めない。遥(はる)か前方を行く水色の帽子は、私の呼びかけに気付く様子もなく先へ先へと進み続ける。

──私は、追いつけない。β(ベータ)世界線へと向かうみんなに追いつくことは、どんなに足掻(あが)いてもできない。気付いてもらえない、憶(おぼ)えていてもらえない。私は世界から排除されるしか、ない。

湧(わ)きあがってくるネガティブな感情に、胸が締(し)め付けられる。

「ねえ、まゆり！　私、ここにいるんだよ⁉」

強引に人波をかき分けようとして、けれど私は誰かの足に躓(つまず)いて、危(あや)うく転びそうになってしまう。つんのめりながら、どうにか体勢を立て直して──そして前に向き直ったときには、もう、私は水色の帽子を完全に見失ってしまっていた。

「私、ここにいるのに……」

けれど、私の声は届かない。

「これが、消えるっていうこと？　だとしたら、私は……」

他の可能性なんて、いらない。一人ぼっちで、私だけが存在し続けるなんて、そんなの辛すぎる。こんな悲しい想いをしなくちゃいけないのなら、私は、今すぐ……。

「クリスちゃん、見～つけた♪」

項垂れる私の右手を、柔らかな二つの手が、優しく包み込んだ。

2

「……まゆり？」

人の手の温もりを、こんなに嬉しく思ったことは、なかったかもしれない。

「えへへー、ごめんね？　お母さんに電話をしてたから、クリスちゃんの声に気付くの遅くなっちゃった～」

顔を上げると、いつの間にか目の前にまゆりが立っていた。

「ん～？　クリスちゃん、大丈夫？」

「……え」

「顔色悪いよ？　もしかして熱中症？　そういうときはねぇ、水分をたくさん取った方がいいんだよ。まゆしぃ、飲み物買ってくるね？」

言って、まゆりが私の右手を離す。

――この手から、逃げていく温もり。

「待って、まゆり！」

　私は急に不安になって、離れていこうとするまゆりの左手を捕（つか）まえる。今まさに走り出そうとしていたまゆりは、びっくりした様子で私の顔を見ていた。

「あ……えっと、大丈夫よ。ちょっと考え事してただけだから」

「ふ～ん……？」

「…………」

　まゆりの手を、離せない。この手を離したら、私は置き去りにされてしまうんじゃないかと、そんなことばかりを考えてしまう。そんなことはない、冷静になるべきといくら自分に言い聞かせても、不安な気持ちを抑制（よくせい）することができない。

　あんまり長く繋いでいると、まゆりに変に思われてしまうかもしれないけど、お願い、今だけは、このままでいさせてほしい。

　ふと自分の左手を見てみると、ほんの少しだけ震（ふる）えていた。……まゆりの手を握（にぎ）っている右手はどうだろう？　私の震えが、まゆりに伝わってなければいいんだけど……。

「あのね、クリスちゃん。まゆしぃ、今からメイクイーン+ニャン^{2}に行くところなんだけど、一緒（いっしょ）に来る？」

「……え？」

　そんな私の精神状態に気付いてかどうかは分からなかったけど、まゆりはギュッと、私の右手を強く握り返してくれた。
「クリスちゃん、まだ来たことなかったでしょ？」
「ああ……メイド喫茶（きっさ）で働いてるんだっけ？」
「うん、そうだよぉ。ねぇ、クリスちゃんも一緒に行こうよ～」
　ニッコリ微笑（ほほえ）むまゆりに、自然と私の口許（くちもと）にも笑顔が浮（う）かぶ。
「そうね。一緒に行かせてもらうわ、まゆり」
「わ～い。それじゃクリスちゃん、まゆしぃの手、離さないでね♪」
　私の手を引き、まゆりが歩きだす。
　本当にまゆりはいい子だ。この優しさに、私は救われた気分になる。きっと岡部も、彼女の優しさに何度も救われてきたに違いない。
「……まゆり、今日は秋葉原にいないんだって思ってた」
「ううん。今日は朝からアルバイトだったんだ～。それでこの後は、お母さんと約束してたからね、ここでクリスちゃんと会えたのは、本当に偶然（ぐうぜん）だったんだよぉ」
「そうなんだ」
　岡部とは会えたの、とは聞けなかった。

まゆりも橋田(はしだ)も、一昨日(おととい)の一件以来、岡部とは会えてない。私も会えてないと思ってるはずだ。だから、まゆりが岡部にかけた電話のことを私が知ってたら、まゆりは訝(いぶか)るだろう。下手な質問はしたくない。

それに、幼い頃(ころ)からまゆりを守ってきた岡部と、そんな岡部に寄り添(そ)ってきたまゆりの間には、出会って二週間やそこらの人間じゃ築くことのできない深い絆(きずな)がある。そんな二人の間に入っていくことは、憚(はばか)られることのように思えた。

しばらく歩いてたどり着いたのは、ラボのすぐ裏手に位置する小さな雑居ビルだった。

「じゃ～ん。ここが、まゆしぃのバイト先なのです」

そう言ってまゆりが指差した先には、〝メイクイーン＋ニャン^2〟の看板。ネコをモチーフにしたと思われる、可愛(かわい)らしいデザインである。

「メイド喫茶って、初めて来るわ」

「えっへへー、きっとクリスちゃんも、気に入ってくれると思うな～」

私の手を引いて、まゆりはメイクイーン＋ニャン^{2}の入り口へ。ドアを開くと、チリンチリンと可愛らしいベルの音が聞こえた。

「お帰りニャさいませ、ご主人様っ」

「フェリスちゃん、トゥットゥルー♪」

お店の中に入った私たちを出迎えたのは、メイド姿の小柄な少女だった。ネコを連想させるポーズをガッチリ決めている。

「ハニャ？　マユシィ、どうしたのニャ？　さっきバイト終わって、出てったばっかりニャのに」

甘ったるいニャンニャン言葉に、ツインテール、ついでにネコ耳。まるで二次元の世界から飛び出してきた〝萌え〟の化身のような少女が、そこにいた。

フェリス……ああそうか、彼女がラボメンナンバー００７の、フェイリスさんか。橋田が熱を上げているというメイド少女だ。

「えっへへー。忘れ物をしちゃったのです」

「もー。おっちょこちょいだニャ～。でもそんなマユシィに、萌え、萌え、ニャ♪」

キュッと自分自身を抱きしめるようにして身悶えるネコ耳メイドの仕種に、私は思わず視線を逸らす。

さっきからネコのポーズをとってみせたり、その動作は非常に落ち着かない。そこで私が思い起こしたのは、遊園地にいるマスコットだ。大仰な動作で子供たちを喜ばせるそれと近しいなにかを、このネコ耳メイドからは感じる。……おそらく彼女の場合、喜ばせるべき対象は子供たちではなく、大きなお友達、ということになるのだろうけど。

メイド姿の少女なんて、この秋葉原じゃ珍しくもなんともないけれど、目の前のネコ耳メイドは、それらとは一線を画する存在だった。ここまで徹底して〝萌え〟で武装した存在を、私はこれまでに一度も見たことがない。

「あ、それでねフェリスちゃん。すぐそこでクリスちゃんに会ったから、連れてきたの」

「おおーっ。あなたが噂のクリスティーニャン？　話は凶真からよく聞いてるニャ！」

「…………」

まゆりからの紹介に、フェイリスさんが切れ長の瞳をキラキラと輝かせた。まるで新しい玩具を見つけたように、あからさまな好奇心が私に向けられる。

……正直、辛い。今の私とはあまりにテンションが違いすぎていて、話すだけでとても疲れそう。今はかまわないでほしいのだけど……。



「って、マユシィマユシィ。すごく暗い顔してるんニャけど……」

「うん、クリスちゃん、最近元気ないみたい……。オカリンもなんだか変だし……、まゆしぃは心配だよ……」

「むー」

よかった。幸いなことに、どうやらフェイリスさんは空気の読める人だったらしい。と、内心でホッと胸を撫(な)で下ろした矢先、ぴょんと跳(は)ねたフェイリスさんが、伏(ふ)せ気味にしていた私の顔を覗(のぞ)きこむようにして、私の目の前でその身を屈(かが)めた。

「クリスティ～～～ニャン？」

ニパーッと会心の笑顔。

……前言撤回(てっかい)。空気読む気ゼロだ。

「おーい、助手さーん？　蘇(よみがえ)った不死身の戦士ー？　腐(くさ)りかけのゾンビー？　セレブ・サイエンティストー？」

「はぁ……」

このまま黙(だま)っているわけにもいかなそうだ。それに、聞き捨てならない単語がいくつも並べ立てられもした。

「それ全部、岡……あいつが言ってたの？」

「あ、やっと反応したニャ～」

私の言葉に、フェイリスさんはとても嬉しそうに笑いながら、ステップを踏むようにクルリと回る。ちょっと待ちなさい、踊ってないで私の質問に答えて。

問い詰めようとしたところで、私の肩にまゆりの手が添えられる。

「クリスちゃん、大丈夫？」

「ええ……なんでもないから。まゆりは、なにも心配しないで」

「……うん」

大丈夫だから、と念を押して、中央通りからずっと繋ぎっぱなしだった手を離した。

いけない、少し思い詰めすぎてた。最近の岡部の態度にまゆりが不安を抱いてる中で、私まで彼女の心を煩わせるわけにはいかない。

しっかりしないと。

小さく息を吐いて、気持ちを落ち着かせる。

「それよりフェイリスさん、だっけ？　直接会うのは初めてよね。同じラボメンなのに」

「そう言えばそうニャ！」

よろしくね、と差し出した私の右手を、フェイリスさんは必要以上に強い力を込めて、ガシッと両手で握りしめる。

「でもフェイリスとクリスティーニャンは、すでに魂レベルでは深く繋がっているのニャ」

……え？

「なぜなら前世では～、フェイリスとクリスティーニャンの間には～、決して結ばれない恋人同士という因果が――」

「なるほど、岡部と同じタイプか。妙な芸名を使ってるのも納得した」

クネクネ身体を捻らせながら、私の右手を右に左に好き勝手に振り回すフェイリスさんの手を振り払う。私の素っ気ない態度に、しかしネコ耳メイドはまるで屈した様子も見せずに、ネコのポーズをビシッと決めて、ウインク一つ。

「なに言ってるニャ？　フェイリスは、フェイリスニャ。それ以外の名前はないのニャ」

タフネス。

少し煽られただけで顔を真っ赤にする岡部とは、どうやら精神力の強さに根本的な差があるらしい。

強敵すぎる。

「……メイド喫茶って、どこもこんな感じなの？」

そうではないと思いたい。彼女だけが特別で、他のメイドの子は、まゆりのように普通の女の子であると信じたい。

それとも、まゆりもネコ耳をつけたらフェイリスさんのように……？

「クリスちゃん、興味ある～？　だったら、ここで働いてみるといいよぉ」

「最初は恥ずかしいかもしれないけど、だんだん気持ち良くなってくるニャン」
　まゆりからの返答は、予想外のものだった。っていうか、どうしてそういう話になるの？　ニコニコ営業スマイルでにじり寄ってくる二人のメイド――一人は私服――に、しかし私は毅然とした態度で応戦する。
「確かにこのお店の制服ってキュートよね。着てみるのも案外悪くないかもしれない。――だが断る！」
「いまならネコ耳を三つつけるニャ♪」
　まゆりまでもがニャンニャン言葉でにじり寄ってくる。助けて怖い。
「さあ、フェイリスたちと一緒に、ニャ♪　って言ってみるニャ。さん、はい」
「「ニャ♪」」
　まゆりとフェイリスさんの声と動作がシンクロする。
「言わんわ！」
「むー、残念ニャ」
一際大きな声を上げてから、激しい脱力感に襲われて、私はがくりと肩を落とした。
「はぁ……調子狂うなぁ。そういう気分じゃないのに」
「どういう気分ニャ？」
「さあね」
　少なくとも、談笑してる気分ではない。……私くらいの年頃の女の子なら、こうして友達と楽しく会話をするのは、普通のことなんだろうけれど。でも今の私には、それが苦痛に感じられる。望もうが望む

まいが、そういうものとは縁遠い生き方しか、私にはできないのかもしれない。
「……それよりまゆり、忘れ物はいいの？」
「あ、そうだ、まゆしぃは忘れ物を取りに来たんだったよぉ。休憩室にあるかなぁ？」
「一緒に探してあげるニャ」
ポンと手を打つまゆり、そんなまゆりに抱きつくフェイリスさん。私も探すのを手伝った方がいいだろう。歩きはじめる二人に続いて、私も[2]ニャンの休憩室へと足を向けた。

3

飲食店の休憩室と聞かされて私が想像していたのは、ロッカーといくつかのイスが並んだだけの、手狭な更衣室のような場所だった。
「休憩室になかったら、どうしようかなぁ」
「大丈夫ニャ。さっきフェイリスも見かけたし、ここにあるはずだニャ」
けれど、フェイリスさんが開けたドアの先に広がっていたのは、ちょっとした応接間といっても過言ではないような、広々とした部屋だった。ソファにテーブル、それにテレビまで置いてある。
「また誰かテレビつけっぱなしにしてるニャ。まったくもー」

休憩室には誰もいなかった。けれどついさっきまで、誰かがここを使っていたらしく、つけっぱなしになったテレビからは、バラエティ番組の映像が垂れ流しになっていた。画面に映っているのはラジ館。どうやら話題は、ラジ館から忽然と姿を消した人工衛星について、のようだった。

「あー、あったぁ。探す必要もなかったよ～」

休憩室に入ってすぐ、まゆりはテーブルに駆け寄って、その上に置かれていた大きな花束を手に取った。美しく咲き誇った白い大輪の花から、甘い香りが漂ってくる。

「それってユリの花束じゃない」

「そうだよ。おばあちゃんのところに、持って行くんだ～」

「プレゼント？　バースデーが近いとか」

訊ねると、まゆりは少し困ったような顔をする。

いけない、私、なにか聞いたらまずい質問をしてしまったのかしら？

「えっと……うん、そうなの～」

けれどまゆりは、いつものようにニッコリ微笑むのだった。……またまゆりに気を遣わせてしまった。ダメね、私。

「そっか、おばあちゃん想いなのね」

「えっへへー。それじゃ、お母さんを待たせてるから、まゆしぃはもう行くね」

言って、まゆりがドアに向かって身を翻す。

「今度こそ忘れ物はないかニャ？」
「うん、大丈夫～」
「まゆり、もう行くの？　だったら私も――」
一緒に帰ろうとドアに足を向けたところで。
背後から伸びてきた二本の白くて細い腕が、私をがっちりと拘束した。
「クリスティーニャンはゆっくりしていくニャー！」
「ちょ、ちょっと、くっついてこないでっ」
すりすりと頬擦りしてくるフェイリスさんがこそばゆい。すぐさま私はフェイリスさんから逃れようとしたけれど、彼女の拘束は、鋼のように頑強だった。
「まゆりっ」
ドアの前に立つまゆりと目が合う。助けてまゆり！　そう目で訴えると、まゆりはやはり微笑んで、小さく頷いた。
「せっかくだからクリスちゃんは、お店でゆっくりしていってね？」
「えっ、ちょ……」
「じゃあ、また明日ね、クリスちゃん。トゥットゥルー♪」
「ま、まゆり!?」
私の訴え空しく、まゆりはひらひら手を振りながら休憩室から出ていってしまうのだった。

パタン、とドアが閉まるのと同時に、拘束から逃れようともがいていた私の身体から力が抜(ぬ)ける。

「ニャフフ、クリスティーニャン、いい匂(にお)いがするニャ〜」

「…………」



この状況、どうしたらいいの……。
「あのね、フェイリスさん。私もそろそろ……」
「クリスティーニャンは～、フェイリスと二人きりなのは嫌かニャ～ン？」
「ああ、いや、別にそういうわけじゃ……」
瞳をウルウル潤ませながら、今にも泣き出しそうな表情のフェイリスさんに、私はそう答えるしかなかった。
彼女は相手の引き止め方というものをよく心得てる。本当に厄介なネコ耳メイドね。
「だったら、お店でなにか食べてくかニャ？　おもてなしするニャ」
「悪いけど、そんな気分じゃないの。私も退散するわ」
けれど、いつまでも振り回されているわけにもいかない。この辺りで、そろそろはっきりと自分の意志を告げて、おいとましないと。
「ええー、帰っちゃうのニャ～？」
帰っちゃイヤイヤ、と言わんばかりに、軽く握った両手を胸元に置いて、上目遣いに私を見つめるフェイリスさん。
……なるほど、橋田なんかはコレにやられてしまうわけね。分からないでもない。
「ごめんなさい、フェイリスさん」



激しい怒りをぶつけてくるパパに、必死になって謝りもしたけれど、怯（おび）えから身体（からだ）を硬直（こうちょく）させてしまっていた私に、はたしてその言葉を口に出せていたのかどうか。

パパの怒りの前兆は、きっとどこかにあったのだろうけど、それに気付けなかった私にとって、パパの怒りは突然（とつぜん）のことでしかなく。冷静な判断力を失っていたあのときの私は、多分、自分の行いのなにがパパを怒らせてしまったのかも、分かってなかった。

私はただ、パパに褒めてもらいたかっただけ。

ちゃんと説明すれば、きっとパパは分かってくれる。私を褒めてくれる。この期（ご）に及（およ）んでそんなことを考えた私は、必死になって、論文の立証——パパの研究の反証を繰り返した。

もしも冷静であったなら、その行為（こうい）はただ火に油を注ぐだけのものであると、気付けただろうに。

私の放った言葉が追い打ちとなって、パパがことさらに怒り狂（くる）ったのは言うまでもない。

——お前など、この世に生まれてこなければよかったのだ！　私は、お前が否定したタイムマシンを絶対に完成させてやる！

「……パパ。優しかったパパ。大好きだったパパ」

あの日を境に、私が大好きだったパパは、いなくなってしまった。

優しい笑顔を私に向けてくれることはなくなった。褒めてくれることもなくなった。パパは、次第に家に寄り付かなくなっていって、そのうちママとも喧嘩が絶えなくなっていって——そしてパパは、家からいなくなってしまった。以来、七年間、私はパパと会っていない。

私が、家族を滅茶苦茶にしてしまった。

自覚がなかったとはいえ、なんて嫌な子供だったんだろう……。

——そしてお前という存在を、この世から消し去ってやるからな！

私はギュッと、自分自身を抱きしめる。

……これじゃ、まるで呪いだ。

七年前にパパが私に突きつけた言葉が、今になって私を搦めとろうとしている。

世界からの排除。

パパがそう望んだから、私は……？

「……なにバカなこと、考えてるのよ」

そんなわけ、あるか。望んだだけでそれが実現するだなんて、非科学的にもほどがある。そんなものは、バラエティ番組でラジ館の人工衛星をUFOかなんかと結びつけてはしゃいでいる連中と、同じレベルの発

想だ。
　パパだってきっと、さっきのバラエティ番組のように「ふざけたことを言うな」と一喝（いっかつ）するに決まってる。
　……けれど。
「ねえ、パパは……今でも、私に消えてほしいって、思ってる？」
　七月二十八日、ラジ館で開かれるはずだったドクター中鉢の記者会見。パパは私に、記者会見への招待状を送ってくれた。
　七年ぶりとなる、突然の連絡（れんらく）。
　パパは私のことを許してくれたんだなんて、楽観的（らっかんてき）に受け止めることはできなかった。むしろ、どうして急に連絡をくれたんだろうっていう戸惑（とまど）いの方が大きかった。それでもここでパパに会うことができれば、壊れてしまった私たちの関係もなにかが変わる――そう、期待もしたけれど。
　ラジ館の人工衛星騒動（そうどう）で記者会見が中止になると、機嫌（きげん）を損（そこ）ねたパパはすぐさま青森（あおもり）に帰ってしまい、私と会ってはくれなかった。
　私の方から会いに行きたいと連絡もしたけれど、「来るな」と一蹴（いっしゅう）されてしまった。
　パパは、今でも私を許してくれてはいないのだろうか。
　今でも、私の存在をこの世から消し去ってやりたいと、そう考えているのだろうか……？
「パパ……」

静寂に包まれた休憩室に、どこからか、上機嫌な鼻歌が聞こえはじめた。その音は段々と近付いてきて、そしてドアが開かれる。現れたのは、フェイリスさんだった。

「ニャッフフ〜ン。クリスティーニャン、おっ待たせニャ〜ン！」

「ああ、フェイリスさん……もうアルバイトは終わったの？」

　壁にかけられた時計に目をやる。フェイリスさんが出ていったのは、ついさっきだったような気がしたけれど、どうやら考え込んでいる間に、それなりに時間が過ぎていたらしい。

「すぐに帰り支度するから、もう少しだけ待っててニャ」

　言いながら自分のロッカーの前へと足を運んで、扉を開けようとしたところでフェイリスさんはピタリと動きを止めた。

「……ニャ？」

　こちらをジッと見て、それからなにも言わずに近付いてくると、身体が触れ合うほど近くに座って、フェイリスさんが私の手を取った。

「な、なにか……？」

「クリスティーニャン、一人で寂しかったのニャ？」

「……え？」

「泣いてたニャ？」

言われて、ようやく私は気付いた。
いつの間にか、頬を涙が伝っている。
「あ、いや、違っ、これは！」
フェイリスさんの手を振り払って、慌てて涙を拭う。
不覚。パパのことを考えているうちに、ちょっとだけ泣いてしまったらしい。
「これは……そう、ちょっと眠くなって！　あくびが出ちゃったのよ！」
「ニャ〜、だったらも〜ちょっと遅く戻ってくるんだったニャ。そしたら、クリスティーニャンの可愛い寝顔を拝めてたかもしれニャいのに〜」
ニヤニヤ笑うフェイリスさんに、私は身の危険を感じた。このネコ耳メイドなら、人が寝ている間にひん剝いて、メイドコスに着替えさせるぐらいのことは、平然とやってのけるのかもしれない。
「そんなことはどうでもいいから！　ほら、早くあなたの家に行きましょ？」
「むー、分かったニャ。それじゃちょっと待っててニャ」
ソファから立ち上がって、改めてロッカーに向かうフェイリスさん。帰り支度を進めつつ、悪戯っぽい笑みを浮かべた顔を、こちらに向ける。
「……クリスティーニャン、今夜はフェイリスのウチにお泊りしていくニャ？」
「しません」

「遠慮しなくてもいいニャ」

「お断りします」

ああ、もう。本当に調子が狂うな。私は深いため息をついた。

けど、なんとなく分かった。多分、彼女は空気が読めないんじゃなくて、読んだ上で、こういう態度なのだ。落ち込んでいる私を見て、元気付けようとしてくれているのだろう。

確かに今の私は、一人になれば深刻な顔をしてばかり。少しくらいは、彼女に感謝してもいいのかもしれない。

「それで、フェイリスさんの家ってどの辺にあるの?」

「フェイリスの家は、この次元には存在しないのニャ。そこに至るまでにはいくつものゲートと次元断層を超えて――」

「そういうのは、いいから」

つまらなそうに唇を尖らせるフェイリスさん。

「歩いていけるから、帰りの心配はしなくても大丈夫ニャ」

「え、そうなの?」

電車くらいは使うだろうと思ってたのだけど。ここから歩いていける距離に住んでるっていうのは、ちょっと予想外だ。

「それじゃ、クリスティーニャンをフェイリスのお家に案内するのニャ♪」

言って、フェイリスさんは休憩室の扉を開けた。フェイリスさんの手招きに、私も続いて休憩室を後にする。

――もうすぐ、私の知らないパパのことが分かる。

歴史の闇に葬られた貴重な資料であると、フェイリスさんは言った。それはいったい、どんなものなんだろう。期待と不安、両方で胸をいっぱいにして、私はフェイリスさんと共に秋葉原の雑踏を歩き出した。

chapter 3

1

メイクイーン+ニャン^{2}を出たフェイリスさんが向かったのは、秋葉原（あきはばら）駅の方角だった。電車は使わないと言っていたけれど……どこに向かうつもりなんだろう？
　線路の下を潜（くぐ）って、昭和（しょうわ）通りの方に出るのかしら？　それとも、秋葉原駅を素通（すどお）りして、その向こう側に？　そういえば、神田川（かんだがわ）を渡（わた）った先には、ラボメンである漆原（うるしばら）さんの家があるんだったっけ。知っている人が住んでいる分、そっちの方が誰（だれ）かが住んでるっていうイメージを持ちやすいかもしれない。
「クリスティーニャン、そっちじゃないニャ」
　などと考えながら歩いていると、フェイリスさんに呼び止められた。
「……え？」
　どうやら道を間違ってしまったらしい。私の少し後ろで、フェイリスさんは足を止めている。場所は秋葉原UPXの近辺だ。
「こっちニャ」

「あ、ごめんなさい。そっちだった……の、ね？」
フェイリスさんが、目の前の真新しい高層マンションに入っていく。
「クリスティーニャン、早く来るニャ～」
「…………………………………………え？」

そこから先は、少しだけ記憶が曖昧だ。

イメージと現実のすり合わせが上手くいかずに呆然とする私は、「もー、しょうがないニャ～」なんて笑うフェイリスさんに引っ張られて、高層マンションの中へと連れていかれた、のだと思う。

我に返ったのは、チーン、というベルのような音を耳にしたとき。私は、フェイリスさんと一緒にエレベーターに乗っていた。どうやら今のは、エレベーターが指定階に到着したことを知らせる音だったらしい。

はたしてどこまで連れてこられたのだろうかと、反射的に現在の階数を確認してみると――いったいなんの冗談だろう。私たちを乗せたエレベーターは、高層マンションの最上階に停まっていた。

「クリスティーニャン、エレベーターから降りるニャ」
「……え、うん」

なんで私、メイドにこんな高級物件に連れてこられてるんだ……。

いや、待て待て。落ち着きなさい。冷静になって、与えられた情報から分析するのよ。

――そう。彼女は自分をメイドだと名乗ったわ。メイド喫茶でのアルバイトが終わったその後も、どういうわけかメイド服にネコ耳というスタイルのまま、この高層マンションまでやってきた。

そこから導き出される解は、至ってシンプル。つまりここでも、フェイリスさんはメイドなのだ。ここはフェイリスさんがお仕えしているご主人様の家であり、フェイリスさんは――

「さあさあ、遠慮せず入るニャン」

「――って、そんなわけあるか！」

あまりに馬鹿げた発想に、私は思いっきり声を張り上げていた。

「ニャ？」

「あっ、ごめんなさい。今のは、なんでも……」

慌てて口を押さえるが、時すでに遅し、である。

「クリスティーニャン、さっきからどうしたニャ？」

私の奇行をさして気に留める様子もなく、フェイリスさんは玄関のドアを開けて室内へと入っていく。

私も多少気まずい思いになりながら、おそるおそるフェイリスさんに続いた。

「ど、どうしたもこうしたも、本当にここがあなたの家なの？　秋葉原駅前の超高級マンション、しかも最上階じゃない」

通された先はリビングルーム。アメリカなら普通の広さだけれども、住宅事情の厳しい日本においては、驚異的といっていいであろう広々とした空間である。

配置されている家具はどれも品が良く、高級感と清潔感に満ち満ちたこのリビングルームからは、居住者の格式の高さをうかがい知ることができた。
「メイドがご主人様たちよりいいところに住んでるとか、それってどうなのよ……」
窓辺に近付いてみると、そこには東京を一望できる絶景が広がっていた。秋葉原の街並みは、遥(はる)かな足下(あしもと)。道行く人の姿が、すごく小さく見える。
な、なんてことなの……人がゴミのよう……。
「ニャフフ。この窓から下界を見下ろして、フェイリスは日夜、こう考えてるのニャン」
窓に張り付く私の隣(となり)に立って、フェイリスさんはその顔に邪悪(じゃあく)な笑いを刻み込む。
「もっと世界に萌(も)えを広めてやるニャ……。約束の日、プロミス・トライアングルが訪(おとず)れるそのときまでニャ!」
「厨二病乙(ちゅうにびょうおつ)」
フェイリスさんのドヤ顔に、私の心は一気に冷静さを取り戻した。
岡部(おかべ)もここに来たら似たようなことやりそうね。
「クリスティーニャン、なんか飲むかニャ?」
「気を遣(つか)わなくていい」

窓辺から離（はな）れるフェイリスさんを目で追うようにして振り返りながら、私はリビングルーム、そして壁の向こうに広がっているであろうこのマンション全体に、意識を向ける。
「……この家、広いせいか、やけに静かに感じるわね。ご家族は外出中？」
「今日は黒木（くろき）が風邪（かぜ）ひいちゃって休んでるから、誰もいないニャ」
「黒木？」
首を傾（かし）げる私に、フェイリスさんはこともなげに答えた。
「ウチの執事（しつじ）ニャ」
「ああ～、なるほど執事ね。あるあ……ねーよ！　ちょっと今、執事って言った？　羊さんじゃなくて!?」
どうなってるのよ、あなたの家庭環境（かんきょう）！　メイドの家庭環境どころか、一般（いっぱん）的な日本人の家庭環境ですらないじゃない！
「黒木はウチに二十年以上仕える、由緒正（ゆいしょただ）しい執事なのニャ」
「あなたと話してると、現実と空想の区別が付かなくなるわ……」
この外見、この立ち振る舞（ふま）いが邪魔（じゃま）してるけど、そろそろ私は認めなければならない。どうやら彼女は、ハイソサエティの人間らしい。
なんでそんな家の子が、メイド喫茶でアルバイトしてるのよ……。
「ニャハハ。まあ、とりあえず寛（くつろ）いでほしいニャ」

ソファに腰（こし）を下ろして、フェイリスさんは自分の隣をポンポンと叩（たた）いている。ここに座れということらしい。私は勧（すす）められるままにフェイリスさんの隣に腰を下ろしながら、この風変わりなお嬢様（じょうさま）の全身に視線を走らせた。

「……っていうか、着替えないの？　あなた、家でもメイド服にネコ耳なの？」

　こんな豪邸（ごうてい）に住んでいるくらいだ。服とかたくさん持っているだろうに、どうして彼女は一貫（いっかん）して、メイドスタイルなのだろうか。

「フェイリスは、メイド服しか着ないのニャ！」

　それがメイドの矜持（きょうじ）、と言わんばかりである。

「ちなみに、クリスティーニャンの着てるその服も、すっごく可愛（かわい）いニャン」

「ああ、これは……ちょっと制服を改造しただけだから」

　それも、もう着ることのなくなった制服を再利用しているにすぎない。

「私は……この七年間、ずっと勉強と研究に明け暮れてて……。服なんて、数えるほどしか持ってない」

同じ年頃（としごろ）の女の子は、きっとたくさん服を持っていて、オシャレに気を遣ってたりするのだろう。けれど私は、そういうものとは無縁（むえん）の人生を歩んできた。

　言っていて、少しだけみじめな気分になる。私も、人のことは言えない。年頃の女の子としては、私だって十分風変わりだし、家庭環境だって日本の一般家庭からはかけ離れている。

それも、フェイリスさんと違って、悪い意味で、だ。

「そうニャの？　だったら、フェイリスの服をいくつか譲ってあげるニャン！」

「……それも、いいかもね」

最期くらい、とびっきりのオシャレをして、美味しいご飯を食べたいかも。

十八歳の少女らしく、たくさん笑って、たくさん楽しいことして、たくさん食べて。最後の晩餐としては、悪くないかもしれない。

「あ、でもサイズが合わないかもニャ～」

言われて、私は反射的にフェイリスさんの胸元に視線を向けていた。小柄で細身のフェイリスさんの身体つきとは不釣合いな、豊満な膨らみが、そこにはあった。

次いで自分の胸元を見下ろして、内心で歯噛みする。……悔しいけれど、彼我の戦力差は火を見るよりも明らかだ。それでも、こうも面と向かって言われてしまっては、私としても立ち向かわざるをえない。

「それはバストのことか……？　バストのことかーっ！」

「身長の話ニャ」

迫る私に、フェイリスさんは実に爽やかな笑顔で応えた。

「……オーマイガッ」

墓穴を掘ってしまった。それも大きな大きな墓穴を。今、この場に岡部や橋田がいなかったことが、せめてもの救いだった。

　うう、穴があったら入りたい。……あ、こんなところに大きな墓穴が。

「……今のは忘れて」

「ニャフフフ」

　私の自爆を目の当たりにして、フェイリスさんがニヤニヤ笑っている。お願い、私のことを少しでも憐れだと思ってくれるのなら、どうか全部忘れて。そしてこのことは、ラボメンのみんなには内緒にして。

「……って、フェイリスさん？」

　フェイリスさんが、両手の指を大きく開いて、わきわきと動かしている。

「そ、その怪しい手の動きは……なに？」

「クリスティーニャン」

　……嫌な予感しかしない。

「おっぱいは～、揉みっ揉みっすると～、大きくなれるっていう～、……科学的な説があるの、ニャー！」

「ちょっ！」

　覆いかぶさるようにして襲いかかってきたフェイリスさんが、私をソファに押し倒す。そしてわきわき指を蠢かすその両手で、正確に私の胸部を捕捉すると、女子ならではの繊細な指使いで開閉運動を開始し

た。

「あっ、コラ、やめっ!」

「クリスティーニャ～ン!　ハアハア、ハアハア……」

頬を上気させて鼻息荒く、フェイリスさんが頬擦りをしてくる。

「やめてっ、やめ……触るなぁ!」

「よいではないか～、よいではないか～」

HENTAIだ!　このネコ耳メイドはとんでもないHENTAIだー!

「やめろと、言っとろーが!」

HENTAIネコ耳メイドの両肩を掴んで、全力で引き剥がす。

「ニャッ」

フェイリスさんがバランスを崩したその隙に、私はソファから逃れて壁際まで退避した。

……ああ、もう、着衣が乱れてる。

「次なにかやったら、許さないからな!」

揉みくちゃになったせいで乱れた衣服や髪を整えつつ、その間も怠ることなく、警戒の視線をHENTAIネコ耳メイドに注ぎ続ける。

「んも～、照れることとニャいのに～」

悪戯っぽく笑いつつ、フェイリスさんも着衣の乱れを整えている。
……とりあえず、さらに襲ってくるということはなさそうだ。
「はいはいセクハラセクハラ。なにが科学的な説よ…… バカじゃないの?」
セクハラ行為は、岡部や橋田で多少は慣れていたつもりだったけど。同性だからこそ許される、スキンシップとセクハラの併せ技というのは、さすがに想定外だった。実害が及ぶ分、岡部や橋田よりも彼女の方が危険な存在だと言わざるをえない。
「それより」
ゆっくり息を吐いて、呼吸を整える。
「早くあなたのお父さんとドクター中鉢のこと、教えて」
「クリスティーニャンはお堅いニャ〜。じゃあ、分かったニャ。ちょっと待ってニャン」
ソファから立ち上がるフェイリスさんの挙動に、ビクッと身体を強張らせてしまう。けれど彼女は、私の方には見向きもせずに、ちょうど私とは対角の位置にある棚へと足を向けた。
「えっと、確かこの辺に……あった、これニャ」
フェイリスさんが手に取ったのは、小さな箱状の物体だった。文庫本よりもずっと小さなサイズで、透明なプラスチック製のケースに入っているようだ。

　ソファの方に戻ってこいと手招きするフェイリスさんに、私はまだ少しだけ警戒しつつソファに腰を下ろすと、フェイリスさんの持ち出した物体を、よく見せてもらった。

「小さいけれど……これって、ビデオテープ？」

　の、ように見える。最近はＨＤＤ内臓の製品に取って代わられて、すっかり目にしなくなってしまったけれど、映像を録画するためのそれと、基本的な構造は同じようだ。大きさがまるで異なるから、まったくの別物なんだろうけど、構造からしてビデオテープ同様に、これもなんらかの記録媒体だと考えていいのかもしれない。

「カセットテープニャ。音を録音するものなんだニャ。二十年くらい前は、これで音楽を聴くのが普通だったのニャン」

「ふぅん、初めて見た」

　ということは、ＣＤの前に普及していた記録媒体なのかしら。

「それで、この中には、なにが？」

「フェイリスのパパと、ドクター中鉢の会話ニャ」

「よくそんなもの、残ってたわね」

「うん、フェイリスのパパが……」

　そこでフェイリスさんが、深く息を吐く。その表情に少しだけ寂しげな色が浮かんだのは、どうしてだろうか。

「……なに？」
「ニャハハ。なんでもないニャ！」
誤魔化すように笑って、フェイリスさんは再びソファから立ち上がった。
「パパは、大学生の頃からボイスレコーダーを日記代わりにしてたのニャ。テープは、本当ならもっとたくさんあったんだニャ。それこそ二千本以上なのニャ。でも十年前に、全部処分しちゃってもう聞けないニャ」
さっき、カセットテープを取り出したのとは別の棚へ。そこからフェイリスさんは、持ち運び用の取っ手がついた見るからに年代ものの家電製品を取り出した。それもまた初めて目にするものだったけど、スピーカーがついていることから察するに、あれがカセットテープを再生させるための機器なのだろう。
「だけどこの一本だけ、パパが書斎で使ってたテーブルに、隠してあったんだニャ。ここに引っ越してくるとき、たまたま見つけたのニャ」
偶然残されたカセットテープってことか。
偶然訪れたメイド喫茶で、偶然パパが出演しているテレビ番組を見て。パパのことを訊ねたフェイリスさんが、偶然にもパパと近しい人間で……。
そして、このカセットテープ。今日だけで、いったいどれだけの〝偶然〟に出会ったことだろう。これはもう奇跡的だと言っていい。
世界から排除される私への、最後の贈り物……なのかな。

　クルクル手の中で回しながらカセットテープを観察していると、ラベルになにか書かれていることに気がつく。
「このテープ、日付がついてるわね。平成六年十月三日……」
「十六年前。パパが二十八か九歳の頃だニャ」
「ふぅん、じゃああなたのお父さんとドクター中鉢って、同い年なのね」
「ハニャ？　確かにそうだけど、なんでクリスティーニャンは、ドクター中鉢の歳(とし)を知ってるのニャ？」
「えっ」
　しまった、今のは迂闊(うかつ)な発言だった！
「そ、それはその……ほら、あれよ！　非ユークリッド空間における位相構造を、座標とベクトルから割り出して、射影(しゃえい)空間を考えた結果から、導き出したというか、なんというか」
　今の失言を取り消そうと、私は自分でもよく分からない理屈(りくつ)をこねる。フェイリスさんも、さぞかし呆(あき)れた顔で見てるだろう……と思いきや、え、なに、その深刻そうな表情？
「な、なんてことニャ……」
　ふるふるとわずかに身体を震(ふる)わせ、恐(おそ)れおののくフェイリスさん。
「その計算で出る答えは、悪魔(あくま)の数字ニャ……。クリスティーニャン、それは禁断の数式ニャ！　なんでそんなことを……」

想定外の反応に少しだけ唖然としてしまってから、咳払いを一つ。
まさか、かぶせてくるとは……。あまり余計な発言はしない方がよさそうね。このままじゃ、終わる話も終わらなくなってしまうわ。
「いいから早く聞かせて」
「じゃあ、カセットデッキをセットして、と～」
再生機器をゴトッとテーブルの上に置いて、プラグをコンセントへ。
「……よくこんなの残ってたわね」
「パパはレトロPCやレトロ家電の収集マニアなのニャ」
フタを開けて、カセットテープをセット。カチャッと小気味よい音を立てて、フタが閉じられた。
「これで準備完了ニャ」
再生ボタンに指を添え、そしてフェイリスさんは、真剣な眼差しを私に向ける。
「……それじゃクリスティーニャン、覚悟は、いいかニャ？　これを聞いたら、もう後戻りできな――」
「そういうのはもういいから」
彼女の扱い方がようやく分かってきた。そう思って言葉を遮ったのだけれど、フェイリスさんは真剣な表情を崩さぬまま、首を横に振った。
「冗談を言ってるわけじゃないニャ」

「……どういうこと？」
「パパたちは、とんでもないものを……作ろうとしてたのニャ」
「…………」
どうやら、冗談を言っているわけではないらしい。
フェイリスさんは、彼女のお父さんと私のパパとの関係を、〝黒歴史〟と言った。そしてこのカセットテープのことを、〝歴史の闇に葬られた貴重な資料〟だと。
表立って明かしてはいけないもの。それが、このカセットテープの中に残されているのだと、私はようやく理解する。
「クリスティーニャン、約束してほしいニャ。これからここで聞くことは、絶対に誰にも話しちゃダメニャン。それが、テープを聞かせる条件ニャ」
「……安心して。誰にも、言わない。……どうせ、私はもうすぐ、消えるから」
「ニャ？　消える？」
「なんでもない」
小さく息を吐いてから、さっきフェイリスさんがそうしたように、私は誤魔化すように笑った。……上手く笑えたかどうか、自信はなかったけれど。
「とにかく、約束する。誰にも言わない」
「信じるニャ、ラボメン仲間として。じゃあ再生するニャ」

フェイリスさんの指が、再生ボタンを押下する。

「ポチッとニャ」

機械的な音を立てて、カセットテープがゆっくりと回り始める。スピーカーから小さな砂嵐のような音が聞こえてきて、それから、『あー、あー』という男性の声が聞こえ始めた。

2

『あー、あー、テステス。今日の秘密会議は、秋葉原の喫茶店にて――』

録音機器の位置を調整しているのか、コトコトと小さな音を交えつつ、最初に聞こえてきたのは初めて聞く男性の声。フェイリスさんの話からして、これが、カセットテープをボイスレコーダー代わりにしていたという彼女のお父さんの声なのだろう。

『こら幸高、そこは〝相対性理論超越委員会〟だろうが』

続いて聞こえてきたのは、聞き間違えるはずもない、私のパパの声だ。とても穏やかな声。私が大好きだった優しいパパが、そこにいた。

『分かったから座ってろよ、章一』

『ええい、私を本名で呼ぶな!』

『ふぅん。芸名か。あたしも前はそんなことしてたなぁ』

　そして三人目の登場人物。少し気だるげな女性の声だ。なぜかその声を聞いて、私は「知っている声だ」と思ったのだが、これは十六年前……私が二歳の頃（ころ）に録音されたものだ。私はパパの交友関係を今日までほとんど知らなかったのだし、多分、気のせいだろう。

　古い機器のせいか、再生される音声は少しこもったような音をしているし、それで誰かの声と勘違（かんちが）いしたのかもしれない。

『そうなんですか、橋田教授？』

『どんな名前だったんです？』

　橋田教授と呼ばれた女性の言葉に、フェイリスさんのお父さん——幸高さんとパパは興味を惹（ひ）かれたようだった。

『それは、秘密』

　問いかける二人に、橋田教授は、優しく微笑（ほほえ）みながら、そう答えた。

　カチャ、という音と共に、スピーカーからの音が途切（とぎ）れた。フェイリスさんが停止ボタンを押したのである。

「ちなみに、幸高っていうのがフェイリスのパパのことで、章一っていうのがドクター中鉢の本名だニャ」

　知ってるわよ……そんなこと。

「橋田教授は、誰か分かんなかったニャ。黒木も会ったことないっていう、謎の人物ニャ」
「敬語を使ってるってことは、この三人の関係は、大学の教授とその教え子二人、といったところなのかしら」
「多分そうニャ」
橋田教授、か……。なんだろう、やっぱりなにか引っかかる感じがするんだけど……考えてもきりがなさそうだし、今は気にしない方がよさそうね。
「それじゃ、先を聞かせて」
「了解ニャ〜」
フェイリスさんの指が、再び再生ボタンを押下した。

ウォッホン、とパパが咳払いをする。
『私のことは、プロフェッサー中鉢と呼びたまえ。それが今の私の、世を忍ぶ名だ』
パパって、そんな昔から〝中鉢〟の名前使ってたんだ……。
『キミがプロフェッサーだと橋田教授とかぶるじゃないか。あー……、ドクターとかに変えないか？』
『あたしはプロフェッサーと名乗る予定はないよ、秋葉幸高』
『そもそも科学者としては、ドクターというのは違和感がある』
『そうか？　ドクター中鉢……なかなか悪くない語感だと思うが』

確かに、私もなぜ〝ドクター〟なのかと不思議に思ったことはあった。どうやらこのテープの中に、命名の秘密が隠されていたようだ。

『だったら本名にするか?』

『それは危険だ。タイムマシンが完成したら、きっと〝学会〟の刺客が、私の命を狙ってくるだろう。それではこの〝中鉢〟の名をくれた師匠に申し訳がない……!』

どこかで聞いたことのあるようなパパの調子に、私は少し驚かされる。これが私の知らない、パパの一面。こんな冗談みたいなことを、私のパパでも言うんだ。

パパが親友と交わしている無邪気な会話に、私の口許は綻んだ。

『師匠って誰だい?』

『あたしだったりして』

『それはない』

茶化すような恩師の言葉を、にべもなくあしらうパパ。

『じゃあ誰?』

『秘密です』

いじり甲斐のない教え子につまらなそうな橋田教授の問いかけを、パパは意地が悪そうな口調で容赦なくはねのける。そんな二人の様子に、幸高さんは呆れた様子で口を挟んだ。

『つまり、いつもの妄想なんだろう?』

『妄想とは失礼な！　私の心の師匠は昔から、アインシュタインと決まっている』

　これまた、どこかで聞いたような調子である。〝ブゥーハハハ！〟という男の高笑いが私の脳裡を過ぎるのはなぜだろう。

『そもそもさ、なんで〝中鉢〟なの？』

　問われて、パパは自慢げに鼻を鳴らした。ガタッと音がして、パパが椅子から立ち上がる気配が伝わってくる。おそらくは大きく手を広げて、そしてパパは声を張った。

『鉢の中心は、宇宙を示す究極の形だと気付いたのだぁ！』

　沈黙。

　ああ、この空気もよく知ってるわ。

『はい、というわけで、定例会議を始めよう』

『おい、無視するな』

　幸高さんの声の調子が変わった。ここまで取り留めのない話が続いていたけれど、そろそろ本題に入るようだ。

　そういえば、これは秘密会議だとかなんとか、最初に言ってたっけ。それにパパは……〝相対性理論超越委員会〟、って。

　さっき、〝タイムマシン〟っていう単語も聞こえた。パパはこの頃からすでに、タイムマシンの研究をしていたんだ。ということは、幸高さん――フェイリスさんのお父さんが協力していた研究というのも、おそらく

は……。

　フェイリスさんが、このテープを闇に葬られたもの、誰にも明かしてはいけないものと言ったのも、これで納得（なっとく）だ。……今のパパが、どういう扱いを受けているのかを考えれば、その理由は考えるまでもないだろう。

『ドクター中鉢、聞かせてくれ。研究が始まって、かれこれ八年ほどが経（た）とうとしているが、まだアレの完成は見えないのかい？』

『そもそも、たった八年でカー・ブラックホールを作ろうなど、無理に決まっているだろう。もっと長いスパンで考えろ』

『そうだよ、秋葉幸高。ドクター中鉢クンはよくやってくれてる』

『……なあ二人とも、ドクターと呼ぶのはやめてくれないか？』

　カー・ブラックホール――自転することで環状（かんじょう）の特異点を持つに至ったブラックホールのこと。タイムマシンにおいて重要な役割を果たす。

　その生成は、タイムマシン研究の基幹をなす要素と言っていい。私たちが作り上げたタイムリープマシンも、岡部たちが偶然（ぐうぜん）、カー・ブラックホール生成の仕組みを生み出してしまったことに端（たん）を発している。

　やっぱり、パパたちがやろうとしていることは……。

『最近、不況（ふきょう）のせいで僕の会社も厳しくなりつつある。資金提供はなるべく続けたいが……』

　落ち着いたパパと橋田教授の口調と比べて、幸高さんの声は重い。

時代としては、バブル経済の崩壊から数年後、世は稀代の大不況、といった頃だと思う。どんな優良企業でも経営に苦しんでいた、そんな時代。他の二人もそのことが身に染みて分かっているからか、幸高さんの言葉に、揃って黙り込んでしまう。

『……潮時、かな』

しばらく続いた沈黙。それを破った橋田教授の声は、少し疲れているように聞こえた。

『え？　橋田教授……どういうことです？』

パパの声に、動揺の色が浮かび上がる。

『これ以上続けても、無駄だってこと』

『そんな！』

『中鉢クンはよくやってくれたけど、やっぱさ、個人の研究じゃ限界があったんだ』

橋田教授の判断は、正しい。タイムマシンの研究なんていう非科学的なことを続けたって、先は知れてる。私が彼女の立場でも、きっと同じことを言った。

……もちろん、今、この秋葉原にいる私の結論は異なる。タイムマシンは開発可能。でも私の持ってる結論は、電話レンジ（仮）という偶然の産物から遡って導き出されたものだ。理論の積み重ねのみで同じ結論に達することは、おそらく誰にもできない。

だから私も、橋田教授の立場なら、きっと同じことを言った。いくら考えたって、無理なものは無理なのだ。

『ゴメンね。八年前、あたしが、学生だったキミたちを焚(た)きつけなければ――』
『それは、教授のノートを勝手にのぞき見た中鉢がきっかけです。責任を感じる必要はありませんよ』
『そ、そのことはもう時効だろ……。だが教授。私は、諦(あきら)めたくない！　私たちの研究は……タイムマシンを作ることは、全人類の夢なんだ！　考え直してください！』
　八年前なら、それはパパたちが二十歳(はたち)の頃。やはり彼らの出会いは大学時代。パパは、タイムマシン開発という壮大(そうだい)な夢に憧(あこが)れ、情熱を注ぐ学生だった。
　教えを授けてくれる恩師がいて、夢を理解してくれる親友がいて。きっとパパの周りには、もっと大勢の、夢を共有する仲間たちがいたことだろう。そんなパパの学生時代を想像するのは、そう難しいことではない。
　なぜなら私は、そういう人間を、一人知っているから。
『いずれにしても、資金はこれまで通りには出せない。研究規模は縮小になる』
『くっ……』
　フェイリスさんは、幸高さんとパパの関係について、十五年くらい前までのものだと言っていた。このテープが十六年前のものならば、それはもう間もなくのこと。きっと資金提供はこのまま縮小され続け、ついには打ち切りになってしまうのだろう。
『……そう言えばさ、まだ聞いていなかったっけ。中鉢クンは、どうしてタイムマシンを作りたいの？』
　再びの沈黙を、やはり橋田教授が破る。

パパがタイムマシンにこだわる理由？　そういえば、私もパパの研究について聞いたことはあっても、その理由までは聞いたことがなかったかもしれない。

『それは……トップシークレットだ。あえて言うなら――そう、ただ名誉のために！』

『ケチ。教えてくれてもいいじゃん』

『国家機密というやつですよ。それに、世の中には、決して触れてはいけないことがある』

『教授、彼は人類が火をおこした瞬間が見たいそうですよ』

気取った口調でもったいぶるパパだったが、幸高さんは悪戯っぽい声であっさりとその秘密を明かしてしまった。

『こ、こら幸高！　余計なことを！』

『別に隠すことじゃないだろ』

……そうなんだ。パパって、そんなこと考えてたんだ。うん、とっても素敵な理由だと思う。正直、ここで〝世界支配のために〟とかなんとか、誰かさんみたいなこと言い出さなくて、ホッとしたかな。

『中鉢クン……キミさ、ロマンティストだね』

二人のやり取りに、橋田教授が優しく笑っている声が聞こえてくる。

『まったく、あれほど言うなと……。そういう幸高はどうなのだ？』

『ビジネスだよ。それ以外に何があるって言うんだい？』

びっくりするほどストレートな幸高さんの回答。実業家らしいといえばそれまでだけど……ビジネスの一環としてタイムマシンを捉えるだなんて、すごい人だ。



『ええい、夢もロマンもないヤツめ!』

『失敬な。ビジネスだって夢とロマンにあふれているんだぞ』

『確かにそういう現実的な視点は必要だよね。秋葉幸高らしいや』

声を荒らげながらも、パパの様子はとても楽しそうだ。幸高さんも、橋田教授も。きっとこの三人で過ごす時間は、パパにとってとても充実したものだったんだろうな。

『橋田教授はどうして?』

『あたしは……』

パパ、幸高さんと来て、次に幸高さんは、当然のように橋田教授に話を振る。すると橋田教授の声が、少しだけ揺れたような気がした。

……わずかな動揺。

パパもそれを感じ取ったのか、ここぞとばかりに橋田教授を問い詰める。

『そもそもタイムマシンが作れると私たちに教えてくれたのは、教授、あなたです。前から思っていたが、あなたはまるで……実物のタイムマシンを見たことがあるかのようだ』

橋田教授はなかなか言葉を返そうとしない。そんな彼女の反応を探るように、パパはさらなる言葉を重ねる。

『もしかして、すでに、タイムマシンは存在している……?』

『………』

パパの言葉はギョッとさせられるようなものだったけれど、でも、決して的外れな言及をしているわけでもない、と思う。

事実として、私たちの時代には、タイムマシンが現れたのだから。

同じように、橋田教授が生きたいつかの時代に、タイムマシンが現れていたとしてもまったく不思議ではない。そして岡部が、タイムトラベラー阿万音鈴羽と接触したように、橋田教授もタイムトラベラーと接触し、その秘密を明かされていたとしても……。

……或いは。

『あたしはただ、過去へ……いや、未来に、忘れ物を届けに行きたいだけ。孤独にそのときを待ち続けるのってさ、けっこうキツいんだ』

或いは、彼女自身が、そうである可能性も……。

『……なんの話です?』

『いつか分かるかもね、キミたちにも……』

『と、ともかく』

漠然とした橋田教授の言葉に、パパと幸高さんが反応に困っている様子がうかがえた。周囲に漂う微妙な空気。それを掻き消すように、パパが再び気勢を上げる。

『私たちは今もタイムマシンに夢を抱いている。それを捨てるのは、嫌だ!』

『だけどさ、中鉢クン。キミだって家族がいるんだし、いつまでも夢を追っているわけにはいかないでしょ?』

橋田教授の言葉に、私はハッとする。

そう——十六年前なら、すでに私は生まれている。このテープの中のパパは、夢を追いかける研究者であると同時に、一人の父親なのだ。

『それは確かに。不幸だよ、不幸。年頃の娘さんにとって、キミのような男が父親なんだからな』

この先を聞くのが、少しだけ怖かった。

これは、十六年前のパパ。私を嫌うようになった七年前とは違う。きっと私を愛してくれている。

……けれど、目を瞑れば、今でも七年前のパパの怒号が聞こえてくる。

このテープからも、パパの怒号が聞こえてくるんじゃないか。そんな不安に苛まされて、私はギュッと手を固く握った。

『ははは、そんなことはない。我が娘は幸せいっぱいだ！』

聞こえてきたのは、幸せそうなパパの声。私の不安を払拭するような豪快な笑い声に、思わず目頭が熱くなる。

『聞いて驚け。この前、なんと足し算の数式に興味を示していたのだ。まだ二歳だというのに！　これはすごいことだぞ！　さすが私の娘！　将来有望だ、ハッハッハ！』

気が緩んで涙が流れそうになるけれど、横にフェイリスさんがいることを思い出して、グッとこらえる。

一人きりだったら、間違いなく泣いてしまってた。

……パパが褒めてくれた。ただの録音だし、それも十六年も昔のものだけれど。それは、この七年間、私がずっと求めていたものだった。

『ドクターは、親バカだね』

『お前の娘はどうなんだ、幸高。去年生まれたばかりだろう』

『いやあ、仕事でなかなか一緒にいてやることができなくてね。あまり顔も見てやれない』

幸せそうな、でも少しだけ申し訳なさそうな幸高さんの声。横目にフェイリスさんを見てみると、彼女は嬉しそうに微笑んで――けれど、同時に寂しそうな表情を浮かべている。

さっきも一瞬、寂しそうにしていた。もしかして彼女も、父親との間になにか問題を抱えてるのだろうか。そう小さな疑問を感じたけれど、スピーカーから聞こえてきたパパの声に、私の意識はそちらへと引っ張り戻された。

『タイムマシンを作れば、娘の生まれた直後にだって戻ることができるぞ。なあ、それはとても素晴らしいことだと思わないか?』

『……うん。そうだね。そんなロマンティストな中鉢クンの娘さんは、幸せ者だ』

橋田教授がそう言った直後、プ、と小さなノイズを挟んで、カセットテープの再生は自動的に止まった。

ガチャリ、とカセットテープが止まる音を境にして、私たちのいる空間に、静寂（せいじゃく）が余韻（よいん）を漂わせながら広がっていった。
衣擦（きぬず）れの音がして、フェイリスさんが再生機器に手を伸（の）ばす。
「ここまでニャ」
再生機器からカセットテープを取り出して、プラスチック製のケースに収納する。私はまだ余韻に身を委（ゆだ）ねながら、そんなフェイリスさんの様子をぼんやりと見つめる。
……この三人のやろうとしていたことは、未来ガジェット研究所と……私たちと同じだ。夢を語る仲間がいて、タイムマシンを本気で実現しようと情熱を注いで。その点において、私たちとパパたちに、違いなんてなかった。
「タイムマシンを作ろうとしてたなんて、驚きだニャ。あ、そういえばこの前、ラジ館でタイムマシン完成発表会見をやろうとして、中止になったんじゃなかったかニャ？　あれからどうなったかニャ〜」
私たちには、タイムマシンの開発成功という奇跡（きせき）に等しい偶然（ぐうぜん）が訪（おとず）れた。けれどパパたちには、それが訪れなかった。
研究開始から八年が経過しても成果は上げられず、パパたちの関係は……。
「…………」
私は、パパの、ほんの一面しか知らなかったんだ。

家にいるときのパパの顔だけ。それ以外のところで、パパが誰と交友関係を結び、なにを得て、なにを失ってきたのか、まるで知らなかった。

録音された十六年前の時点で、八年。

私とパパの関係が壊れてしまった七年前で、十七年。

それが、タイムマシンのためにパパが費やしてきた時間。そして幸高さんや橋田教授――夢を共有しあった仲間たちとの思い出が、そこに積み重ねられていく。

夢も、情熱も。楽しい思い出も、苦い経験も。成功も、失敗も。いったいどれだけの想いが、そこに蓄積されていたことだろう。

それは、なんて言葉で表現するのが適切なのか、私には分からない。誇りと呼ぶべきなのか、それとも青春と呼ぶべきなのか、或いは人生そのものと呼ぶべきなのか。ともかくそれが、パパの背負っていたもの。そして、なにも知らない十一歳の少女が、土足でズタズタに踏みにじったものだ。

――満足か！　その歳で私の論文をことごとく論破して、満足なのか！　ふざけるな！

ごめんなさい、パパ。私は、本当になにも分かってなかった。

　七年前の誕生日に、どうしてパパを怒らせてしまったのか。あの日の私には、その理由が全然分からなかったし、今日、このカセットテープを聞くまでの私も、分かったつもりになっていただけで、本当のところはなにも理解してなかった。

　馬鹿な子供だったと思う。とても嫌な子供だったと思う。パパが怒るのも、仕方のないことだったって、そう思う。

──お前など、この世に生まれてこなければよかったのだ！　私は、お前が否定したタイムマシンを絶対に完成させてやる！　そしてお前という存在を、この世から消し去ってやるからな！

　世界から排除されるということは、私に対する罰なのかもしれない。

　パパの想いを踏みにじった私に対する、罰。

　……それで私は、許されるのかな。パパは私を、許してくれるのかな……？

「ねえ、クリスティーニャン」

　フェイリスさんの呼び声に、私はようやく、余韻の淵から這い上がる。……身体が重い。パパの怒声が、その内に込められた想いを伴って、私に絡みついている。

「……なに？」

「このテープ、久々に聞いて思ったけど、ドクター中鉢って凶真に似てると思わないかニャ？」

「そうね……私もちょっと、そう思った」

本名で呼ばれることを嫌ったり、存在しない仮想敵と戦ってたり、自慢げに独自の理論を披露してみせたり。……夢を追いかけるのに一生懸命になったり、その夢を、仲間と共有しあってたり。

本当に、そっくりだと思う。

……って、もしかして私、無意識のうちに岡部にパパの姿を重ねてた？　私って、とんでもないファザコンだったのかな……。

「で、クリスティーニャンは、中鉢さんとはどんな関係なのニャ？」

「それは……」

父親同士が交友関係にあったというフェイリスさんになら、パパのことを明かしてもいいのかもしれない。カセットテープのことを秘密にするよう言った彼女なら、頼めば、きっと私のパパのことも黙っていてくれるだろう。

「……あなたには、関係ない。詮索しないでくれると、助かる」

けれど私は、結局パパのことを明かさなかった。

フェイリスさんは、二人の関係を〝黒歴史〟と表現していた。おそらく十五年前に途絶えたのは、資金提供の件だけじゃない。きっと、親友という間柄そのものが、十五年前を境に断ち切られてしまったことを意味しているのだ。

十五年前、二人になにがあったのかは分からないけれど、それが理由で、幸高さんはパパのことを恨んでいるかもしれない。フェイリスさんの態度からして、パパのことをそんなに快く思っていないようだし。そう考えたら、怖くて明かすことなんてできなかった。

「フニャ〜。せっかく、極秘のテープを特別に聞かせてあげたのに……」

それには感謝してる。おかげで、パパのことを色々知ることができた。

……自分の罪の重さも理解してしまったけれど。

でも今日、ここに来て、本当によかったと思ってる。

「…………」

幸高さんと、フェイリスさん。二人のように、私もパパともっと上手にやれたらよかったのに。

「……ねえ」

気付くと、私はフェイリスさんに質問を投げかけていた。

「フェイリスさんは、大好きな人に、ひどいことを言われたことある？　〝お前なんて消えてしまえ〟とか、そんなようなこと」

「えっ……」

私からの突然の質問に、フェイリスさんは驚いて目を大きく見開いている。

「あなたは……自分がこの世界に必要な人間だって、断言できる？」

「…………」

「私は……分からない。分からなくなった。誰かに自分という存在を認めてもらいたくて、忘れられたくなくて、でも本当は必要とされていないんじゃないかって、すごく不安で……」

七年前のことを、パパにきちんと謝りたい。

その上で、もう一度聞きたい。パパは私のこと、どう思ってるの、って。

そして許されるなら、もう一度、私を愛してほしい。私のことを、抱きしめてほしい。

「消えてしまえ……か。確かにひどい言葉ニャ。でも絶対、それは本心じゃないニャ」

「そうかしら」

フェイリスさんの慰めは、もちろん嬉しい。私だって、そうであってほしいと願ってる。

「言った本人も、後悔しているはずニャ。絶対に……」

「…………」

けれど、私が七年前に踏みにじったものは、あまりにも重い。……許してもらえるとは、とてもじゃないけど、思えない。

「フニャアアアアッ、もどかしいニャ～！」

項垂れる私の両肩を、フェイリスさんが激しく揺さぶった。

「悩んでても、なにもはじまらないニャ！　そういうときは、話し合った方がいいニャ！　いきなり仲直りはできなくても、想いを伝えれば、あとは時間が解決してくれるニャ」

「……時間は、もう残ってないのよ」
パパの住んでいる青森まで、岡部と一緒に行く約束をしたことを思い出す。
岡部も同じようなことを言って、約束をしてくれたのだけれど、あの約束が果たされることは、多分もうない。
岡部には、まゆりを助けてもらいたい。残りの時間は、その決断のために使ってほしい。私のために、これ以上岡部を煩わせるようなことは、したくないもの。
「よく分かんないけど、電話なら、すぐニャ！　とにかく話をしてみるのニャン。向こうも、後悔してるかもしれないニャ」
「そ、それは……無理よ……」
「連絡先、分かんないのかニャ？」
「そうじゃないけど……」
「だったら無理じゃないのニャ！　さあ！　善は急げニャ！」
フェイリスさんは、執拗に私に迫る。……どうして彼女は、初めて会ったばかりの私なんかのために、こんなにも必死になっているのだろう。
「でも……この前電話したときも、かけてくるなって言われたし……」
「想いは伝えたのかニャ？」
「伝えてないけど……」

「今度こそ伝えるニャ！　ほら！」

……確かに私は、パパになにも伝えてない。この前の電話だって、会いに行きたいと言っただけで、それ以上のことは、なにも。

けれどそれは、パパが私との会話を拒絶するからだ。決して私が、なにも伝えようとしなかったわけではない。

もう一度電話したって……。

「……どうせ、無駄だと思う」

「クリスティーニャン……」

無駄だと、思う。きっとパパはまた、私を拒絶する。

……けれど、このままなにも伝えずに世界から消えていくのは……寂しい。

「だから、一方的に一言、謝るだけにする」

いつの日か、パパに許してもらいたいから。

だから伝えよう、一言だけでも。

「うん、それで十分ニャ！」

どうせ、失うものなんて、もうなにもないしね……。

私はポケットからケータイを取り出して、アドレス帳からパパの番号を選択する。ただそれだけの単純な操作に、しかし私の指は強張って、ひどく手間取ってしまった。

「……はぁ」
緊張（きんちょう）する。この前、パパに電話したときもそう。七年前のことが昨日の出来事のように思い出されて、冷静でいられなくなる。
深く息を吸い、ゆっくりと吐（は）く。覚悟（かくご）を決めて、私はケータイの通話ボタンを押下（おうか）した。
「…………」
受話口から聞こえてくる呼び出し音が、とても長く聞こえる。
何分も、何時間も呼び出し音が鳴り続けているような、そんな錯覚（さっかく）に陥（おちい）って、私は落ち着くためにもう一度、深呼吸をした。
『……誰だ』
そしてついに、通話が繋（つな）がる。
「あっ……えっと……」
思ったように、声が出ない。喉（のど）に栓（せん）でもされてしまったかのように、息が詰（つ）まる。搾（しぼ）り出すようにして、ようやく口から出た言葉も裏返ってしまっていて、まともに声にすることができない。
しっかり、しないと。パパに、私の想いを伝えないと……。
「あ、あのね、わた――」
『……紅莉栖（くりす）か？』

　まだ名乗ってもないのに、パパが私の名前を呼んだ。予期していなかったことに驚いて、ようやく口から出かかった言葉は、またしても私の中に引っ込んでしまう。
「えっ……な、なんで、分かったの？」
『分からないはずがないだろう、その声、忘れられんよ』
　思いがけないパパの言葉に、強張っていた全身から、力が抜けていく。
「そう……。そうだよね……親子だもんね……」
　自然と顔が綻んでくる。
　フェイリスさんの言ったとおりだ。七年前は、確かにひどいことを言われた。けれど、それは本心なんかじゃなかった。パパは今でもちゃんと、私のことを気にかけてくれている。そうでなければ、ちょっと声を聞いただけで人の判別なんて――
『勘違いするな！』
「……え？」
　私の耳をつんざいた怒号に、綻びかけてきた私の顔は、再び凍りつく。
『もう電話するなと言っただろうが！』
「あ、あの……パパ……」

　パパの怒号が、私の心を引き裂(さ)いていく。一瞬(いっしゅん)でも淡(あわ)い期待を抱(いだ)いてしまった分、その傷は深くて、痛い。
『そうか……また、私を笑うつもりなんだな！』
「ちが……」
『今度は、バラエティ番組に出た私をあざ笑うのか！　もう研究者でもなくなってしまったこの私が、そんなにおかしいか！』
「違うの、パパ聞いて！」
　お願い、怒鳴らないで。私はパパのことを、笑ったりなんてしない。七年前だって、そんなつもりじゃなかった。でも、分かってる。私はパパを傷つけた。だから、パパ……。
『いいか、タイムマシンの理論はもうできているのだ、絶対に完成させてやるぞ……！　完成したら、過去に遡(さかのぼ)って、すべてをなかったことにしてやるからな！』
「パパ……パパ聞いて、私……」
『よく覚えておけ！　貴様という存在は、もうすぐ消えてなくなるのだ！』
　……うん、分かってる。私はもうすぐ世界から排除(はいじょ)される。全部、なかったことになる。消えてなくなる。私の想(おも)いも、どこにも行き着かずに……このまま……。
　けれど、パパ。お願いだから、最期(さいご)に一つだけ教えて……。
「……ねえ、パパ。私のこと、憎(にく)んでる？」

……………………………………………………………………。

私の問いかけに対する、パパからの返答は、なかった。

気付くと通話は切れていて、ツー、ツー、という話中音だけが、受話口からいつまでも流れ続けていた。

「……それがパパの望みなら、もうすぐ叶(かな)うから。だから、私のことなんて、二度と、思い出さなくてもいいよ……」

終始ボタンを押して、ケータイを持った右手をだらりと下げる。

「………………」

私のすべては、消えていく。私の声は、誰にも届かない。



これが世界の選択。

世界から消えてなくなるということ。

私に下される、罰。

「クリスティーニャン……」

フェイリスさんが、泣きそうな顔で私のことを見ている。どうしてフェイリスさんが……ああ、そうだった。パパに電話するよう言ったのは、彼女だった。

……思考が鈍い。身体が重い。底なし沼にはまってしまったかのように、色々なものが鈍重になっていく。

「やっぱり、駄目だった」

「諦めたら駄目ニャ！　このままじゃきっと後悔することに――」

「もう、ほっといて」

答えは出た。……最初から分かりきっていた答えが。

「なに言ってるニャ！　そんなことできるわけないニャ！」

「いいの。どうせ、あなたももうすぐ、私がここにいたことを忘れるから」

消えてなくなる。私が出会ったすべての人たちの中から、跡形もなく。

「無駄なの。そんなに干渉したって、意味がない。エネルギーの無駄よ」

「無駄って……」

それが世界の選択。

岡部も言ってた。どれだけ抗ったって、覆せないって。

「そもそも私、なんであなたみたいな、ニャンニャン語で喋る変な人に、マジレスしてるんだろう……」

初めて会った人の家に押しかけて……悩みまで打ち明けて……なにやってるんだ、私？

「ク、クリスティーニャン！」

「その呼び方も嫌い」

あなたのお遊びに付き合っていられるような、そんな気分じゃないの。最初から、ずっとそう言ってるじゃない。人を馬鹿にするのも、いい加減にして。

「フェイリスは、クリスティーニャンが心配ニャ！」

死亡宣告。

私は死ぬ。

私は消える。

そう、世界に望まれている。

泣きたい。叫びたい。理不尽に怒りを撒き散らしたい。

……ダメだ。次から次へと湧(わ)き上がってくるネガティブな感情を、抑(おさ)えることができない。このままここにいたら、私、彼女にもっとひどい言葉をぶつける。

「……今日は、ありがとう。あなたのお父さんのテープ、聞かせてくれて。もう、帰るわ」

リビングルームを出て、玄関(げんかん)へと向かう。

後ろから、言葉もなくついてくるフェイリスさんの気配が感じられた。

「あのね、また、いつでも――」

「もう、二度と会うこともない」

「え……」

なるべく平坦(へいたん)に言う。けれど、そうして放たれた言葉ですら、棘(とげ)にまみれている。

「さよなら。元気で」

……こんなのは、八つ当たりだ。彼女は、とても親切にしてくれたのに……。

「クリスティーニャン!」

見送ってくれた彼女の顔を最後まで見ることもなく、私は彼女の家を出た。

最上階で停止したままだったエレベーターに乗り込んで、一階に向かう。

私は壁(かべ)に寄りかかって、カウントダウンを続ける階数表示をぼんやりを眺(なが)めながら、ぽつりと呟(つぶや)いた。

「私……最低だ」

chapter 4

1

八月十六日、十七時三分。

私は一人、ラジ館八階の階段に、腰を下ろしている。

館内の様子は、昨日、岡部を捜しに来たときとなにも変わっていない。どこまでも暗くて、どこまでも静か。賑やかな電気街の中にあって、このビルの中だけ、時間が停滞しているみたい。

心を落ち着かせるには、ここは、とてもいい場所なのかもしれない。

「……自分の死ぬ場所なのにね」

そう思うと、妙な気分がした。

昨日は、フェイリスさんの家を出てから今朝まで、ずっとラボで過ごした。

どうすれば岡部を苦悩から救い出せるのか、私もまゆりも助かる方法はないのか、検証するために。

ラボにはやっぱり誰もいなくて、私は一人。

難題と向き合うときは、集中できるから一人の方がいい。けれど、昨日に限っては、誰かラボに来てくれないかと願わずにはいられなかった。

頭の中でずっと、岡部の死亡宣告と、パパの拒絶の言葉が反響している。ラジ館で垣間見た別の世界線の記憶が、私に苦痛を与える。

……誰かがそばにいてくれれば。そうすればきっと、気が紛れるのに。

岡部から与えられた情報を整理し、アトラクタフィールド理論の盲点を探り、あらゆる可能性をホワイトボードに書き連ねていく。

あれもダメ。これもダメ。検証を進めていく中で、次々と可能性が消えていく。それはまるで、自分の存在を否定していく作業のようにも思えて。

どうしようもない空しさばかりを募らせて、そのうち私は、ペンを置いた。

私が死んだらどうなるんだろうという疑問が、脳裡を過ぎる。私自身が、じゃなくて、私の周囲への影響は、っていう疑問。

ママは、悲しんでくれると思う。たった一人の娘だし、私の死が、ママの人生に大きな影響を与えてしまうのは間違いない。私って親不孝者だな、と考えるのと同時に、ママが泣いてくれるであろうことが、嬉しくもあった。

教授も、残念がってくれるかもしれない。論文の執筆を私に任せてくれたように、期待してくれてたんだと思う。けれどそれだけだろう。研究所で私が担当していた仕事も、日本に来る前にキッチリ整理をつけてきている。たとえ私が突然いなくなっても、おそらくは同僚の先輩辺りが、なんの滞りもなく私の仕事を引き継いでくれるはずだ。そして全体にはなんの影響を及ぼすこともなく、粛々と研究は進められていくだろう。研究所に私がいた証も、そう長い時間を要せずに消えてなくなると思う。

パパは……。パパは、喜ぶのかな。ようやくいなくなったかって、笑うのかな。……私のこと、許してくれるのかな。死後の世界を信じるわけじゃないけれど、でも、お墓参りに来てくれたら、嬉しいかもしれない。

そして、ラボのみんなは、どうだろう。この二週間で手に入れた、私の大切な人たち。彼らの中に、なにか影響を与えることはあるのだろうか。

――答えは、〝なにもない〟。

七月二十八日、ドクター中鉢の会見後に死んでしまうβ世界線の私は、岡部と出会うこともなく、ラボメンになることもない。

世界線が変われば、世界は再構築される。人間の記憶も書き換わる。

β世界線の彼らは、誰も、私のことを知らないのだ。

もしかしたら、新聞やテレビで私の死が報じられて、それを目にすることはあるかもしれない。けれどそれだけ。ラボの日常は、最初から私なんていなかったものとして続いていく。

私は、唯一の居場所にすら、私がいた証を残すことができない。

……これが私の死による影響の、すべて。
なんて希薄な人生なんだろう。
これじゃ、いてもいなくても変わりはしない。
パパにも存在を否定されてしまった。
そんな私に、岡部とまゆりが手を取り合って未来に向かって歩いていくのを、妨げていい道理なんて、どこにもありは……しない。
「……解は、出た」
岡部を苦悩から解き放つために、私が導き出した解。
あとは、それを岡部に伝えれば、ラボでの私の役目もきっと終わる。
朝になってから、私はラボを出てこのラジ館へとやってきた。もう少し、一人で心を整理する時間が欲しかったから。
それから、ここで待つのが、一番いいんじゃないかって、思ったから。
「…………」
そうして待ち続けていると、遠くの方でコツリと小さな音が聞こえた気がした。気のせいだろうかと耳を澄ませていると、疑うくらい小さかったその音は、コツコツと断続的に続き、そして次第にはっきりと聞こえるようになっていった。
誰かがラジ館の階段を上ってくる。

私は階段に座り込んだまま、その人物が八階まで上がってくるのをじっと待つ。やがて現れたのは、暗いラジ館の中でもそれと分かる白衣の男——岡部だった。

「こんなところで奇遇ね、岡部」

「くっ……紅莉栖か？」

そのままの姿勢で声をかけると、予期せぬ遭遇に岡部は上ずった声を上げた。よほど驚いたのか、大袈裟なリアクションで身を硬直させている。

「驚きすぎ」

「フ、フン。今のは敵の襲撃に備えて、身構えただけだ」

あ、厨二病。

岡部の様子が昨日と変わってる。声の調子も、昨日より明るい。

まゆりに会いに行かせたのがよかったのかもしれない。もしかしたら表面上だけ、いつもどおりに振る舞おうとしているだけなのかもしれないけれど、そうだとしても、演技をする余裕くらいはできたということだ。

「それより、お前はこんなところで、なにを？」

「あんたを待ってた」

「俺を……？」

私の解を伝えるために。
また電話には出ないかもしれないし、それにこのことは、直接会って話したいと思ったから。だから岡部の現れそうなところで、こうして待ってた。
「昨日の話。あのまま放っとくわけにはいかないでしょ？」
「……っ。紅莉栖、昨日は……」
岡部の声のトーンが変わる。昨日のことを気にかけてるのだろう。私が言えと要求したこととはいえ、岡部がしたことは死亡宣告だ。やっぱり言うべきじゃなかったと、後悔しているらしい。
「私なら大丈夫よ。昨日はさすがに、ちょっと驚いちゃったけどね。でも、もう落ち着いたから、気にしなくていい」
「…………」
岡部は黙り込んで、足下をじっと見つめている。この暗さじゃ、岡部の表情まではよく見えないけれど……この様子だと、岡部に直接会いに来たのは、正解だったかな。
「岡部、結論は出た？」
「それは……」
なんの結論だ、とは問わずに言葉を濁したのは、私の質問の意味が岡部にもよく分かっているからだろう。

まゆりと私、どちらを助けるのか。或(ある)いは、どうやって二人とも助けるのか。その結論を問い質(ただ)したのだけど、やっぱり答えは見つかってないらしい。

「はあ……。まだ悩(なや)んでるの？」

「…………」

岡部は答えない。

「ねえ、岡部。昨日、まゆりとは会えたの？」

「……ああ」

……いつもどおりなのは、やっぱり表面だけだったか。本当、世話の焼けるやつ。

私が急に話を変えたことを怪訝(けげん)に思ったのか、岡部は一瞬(いっしゅん)だけ私の方を見て、またすぐにうつむいてしまう。

「私もね、昨日、まゆりと会ったのよ」

「そうなのか？」

「秋葉原(あきはばら)でね。多分、あんたより早く。昨日はアルバイトしてたんだって。あんた、知らなかったの？」

「十三日から連絡(れんらく)を取ってなかったからな。そうか、秋葉原で会えていたのか……」

はたして、どこまでまゆりを捜しに行ったのか。岡部は苦笑(くしょう)している。

「私のことも、心配してくれてた。まゆりって、本当にいい子。……あんたにはもったいないくらい」

「……なに？」
「あんたって、まゆりのこと好きなんでしょ？」
「なっ……」
突然なにを言い出すんだ、と言わんばかりに岡部が慌てふためいている。私は岡部を直視せず、ぼんやりと天井に視線を向けながら、話を続ける。
「見てれば、なんとなく分かる。ずっとまゆりのこと、守ってきたんでしょ？　まゆりも、多分そう。きっと、ずっとそばに寄り添って、あんたが安心できるように笑ってたんだわ」
「……………」
「あんたは今までどおり、まゆりを守るべきなのよ」
それだけを考えてくれればいい。
それが私の解。
β世界線での私の死は……覆らない。
α世界線にいる限り、まゆりの死を避けられないのと同じように。そのことを岡部は、身をもって理解してるはず。
「……お前はどうなる。お前は……怖くないのか」
「怖いに決まってるでしょ」
正直に答える。強がったって、きっと岡部は信じやしない。

「みんなβ（ベータ）世界線に行ってしまって、私だけが一人、α（アルファ）世界線に取り残されるのかもしれない。みんなも私も変わらずここにいるけど、存在しないはずの私は、みんなから認識（にんしき）されなくなるのかもしれない。或いは、あんた一人がβ（ベータ）世界線に移動して、α（アルファ）世界線からいなくなるのかもしれない。……私はあんたのことを覚えてなくて、何事もなかったかのようにアメリカに帰っていくのかもしれない」

膝（ひざ）を抱（だ）き寄せて、身体（からだ）を小さくする。身体の震（ふる）えを、岡部に悟（さと）られたくなかった。

「かもしれない。かもしれない。かもしれない。いろんな可能性を考えて、そのたびに絶望的な気分になる。……だけど岡部……両方救うのは、無理なのよ。そうでしょ？」

岡部にだって分かっているはず。

私の死とまゆりの死。天秤（てんびん）は分かれてしまっている。両方選ぶことはできない。

岡部、目を背（そむ）けないで。現実を受け入れて。

「俺は……それでも俺は、お前も、まゆりも救ってみせる！」

「できもしないこと、言わなくていい！」

譲（ゆず）ろうとしない岡部に、私は強い口調で言い放った。

「どう足掻（あが）いたって、どちらか選ぶしかないの。二人は選べない。だったら私は、まゆりを選んでもらいたい。まゆりを見殺しにして私を助けてほしいなんて、言えると思う⁉」

「だが……」

「だが、じゃない。これが私の解。岡部、まゆりを助けて」

お願い、首を縦に振って、岡部。

私はそう願ったけれど、しかし暗闇（くらやみ）の中で全身を震わせていた岡部は、それでもなお、強情（ごうじょう）に首を横に振った。

「そんな簡単に諦（あきら）められるか！　お前を見捨てることなんて……そんなこと、できるはずがないだろ！」

「できる、できないじゃない。まゆりを守るために、あんたは選ばなくちゃいけないの。それしか道はない」

それが、結果として私を切り捨てることになったとしても。あんたが最も優先すべきは、まゆりなのだから。

「ダメだ！　お前は、俺たちの大切な仲間だ！　俺はお前も見捨てない！」

「岡部！」

私は立ち上がって、そのままの勢いで岡部に詰（つ）め寄ると、白衣の裾（すそ）を掴（つか）んで力任せに引き寄せた。そして目の前に迫（せま）る岡部の顔を睨（にら）みつけて、強く言い聞かせる。

「他（ほか）に解決策があるの？　ないんでしょ⁉　私は、まゆりを犠牲（ぎせい）にしてまで生きていたくない！　もしあんたがまゆりを助けなかったら……私は一生、あんたを恨（うら）むから！」

「くぅ……」

岡部の顔が、くしゃくしゃに歪（ゆが）む。

今にも声を上げて泣き出しそうな顔をして、けれど、涙（なみだ）一つ流さない。

……岡部、あんたは本当に強いね。

あんたはまだ、諦めたくないと思ってる。大切な仲間を守りたいって、そう思ってる。

これまでも、その強い心一つでタイムリープを繰（く）り返してきた。

だからこそ、悔（くや）しいよね。

こんな終わり方、嫌（いや）だよね。

その道がどんなに険しくても、あんたならきっと乗り越（こ）えられた。

でももう、道は残されてない。

残されているのは、β（ベータ）世界線への道だけなのよ、岡部。

「……え?」

不意に、岡部は両手を広げて――私を強く、抱きしめる。

「お前は、ここに、いるのに……！　こんなの……こんなのあんまりだ……！」

「岡部……」

突然（とつぜん）のことに、ビックリしてしまったけれど、でも、岡部の胸は温かくて……なんだか、とても心が安らいで、私は強張（こわば）っていた身体から力をぬいて、岡部に身を委（ゆだ）ねる。

……ずっと、こうしたかったのかもしれない。

昨日からずっと、怖くて。切なくて。寂しくて。誰かに強く抱きしめて——ううん、多分、あんたにこうして、抱きしめてもらいたかった。

あんたはいつも唐突で。

あんたはいつも強引で。

私の前に現れて、私を引っ張り回して。好き勝手に働かせて。

……でも、そんなあんたについていくのは、嫌じゃなかった。

岡部、あんたが私のこと、どう思ってるか分からないけど……私だって、いつも悩んでる。自分の選択が本当に正しいのかって、いつも疑ってる。暗闇の中を手探りで、泣きたくても、辛くても、不安でも、平気なふりして歩いてきた。

そんな私に、あんたはいつも光を差してくれた。行くべき方向を指し示して、引っ張っていってくれた。私はそれが、嬉しかった。

……岡部。私は多分、あんたのことが好き。

できることなら、ずっとあんたと一緒にいたかった。けれど、それは叶わない。……願っちゃいけない。

岡部は、まゆりと一緒に未来に向かっていくんだから。

……だからこの気持ちは、私の心の奥にしまおう。この気持ちを伝えてしまったら、あんたを惑わせることになるから。

「……ありがとう。私のために、そこまで苦しんでくれて。でも、もう十分。私は大丈夫だから、後は、まゆりのことだけ考えて」

　私を抱きしめる岡部の腕に、ギュッと、一際強い力が込められた。

「俺は……諦めない。絶対にだ……！」

「……っ」

　私は全力で、岡部を突き飛ばした。

　後ずさる岡部よりも、突き飛ばした私の方が後ろにふらふらよろめきながら、どうにか踏みとどまる。

　岡部の言葉が信じられなかった。

　この期に及んで、この男は、まだそんな夢みたいなことを……！

「話にならない……！　このマザーファッカー！」

「おま……っ」

「私は大丈夫だって言ってんでしょ！　なんで分かってくれないの……あんたがまゆりを助けることが、相対的に判断してベストなのよ！　いったいなにが気に入らな——」

「相対的判断などクソ食らえだ！」

　岡部の張り上げた声に、私の声は掻き消された。その声に、私はあることに気がついてハッと岡部の顔を見る。

「俺は神じゃない。気がついたらそれに等しい立場にいたけど、全然違（ちが）う！　誰を助けて、誰を犠牲にするかなんて、俺には……もう、決められない……っ」

……私の声は、岡部に届かない。

「だから……俺は、今度こそ……二人とも救ってみせる！」

「岡部！」

そう宣言して、岡部は階段を駆（か）け下りていく。

私はすぐに岡部を追いかけようとして、けれど、躊躇（ためら）いが私の足を床（ゆか）に縛（しば）りつけた。

……岡部の執念（しゅうねん）。

そこに私は……パパを重ねて見た気がした。

パパがタイムマシン開発を諦めなかったように、岡部も頑（かたく）なに、私もまゆりも救う道を諦めないのかもしれない。

――あのねパパ。パパの理論じゃ、タイムマシンを作るのは不可能だと思うの。

パパに突きつけた事実。パパに拒絶（きょぜつ）されたときの言葉が、脳裡（のうり）を過（よ）ぎる。

……私、このまま岡部を追いかけて、それでどうするつもりなの？　あのときパパにしたように、もう一度、岡部に事実を突きつけるの？　そんなことをしたら、私は……岡部からも拒絶されてしまうかもしれない……。

そう考えたら、私は、すぐさま岡部を追うことができなかった。

「……もう、誰にも拒絶(きょぜつ)されたくない」

震える手を、強く握(にぎ)りしめて。

「それでも、私は……！」

岡部に拒絶されても、いい。これ以上傷ついたとしてもかまわない。それでも私は、あんたとまゆりをβ(ベータ)世界線に送り出してみせる。

それがラボメンとして――仲間として、最後に私がしてあげられることだから。

私は決意と共に、階段を駆け下りていった。

2

――だが教授。私は、諦めたくない！　私たちの研究は……タイムマシンを作ることは、全人類の夢なんだ！　考え直してください！

――私たちは今もタイムマシンに夢を抱(いだ)いている。それを捨てるのは、嫌だ！

夢を分かち合った仲間たちと一緒に、夢を追いかけ続けたパパ。
フェイリスさんに聞かせてもらったテープの中の、十六年前のパパの必死な声が、頭の奥に反響する。
フェイリスさんが言っていた。
岡部とパパは、よく似ているって。
私も、同意見。
あの二人は、本当によく似ている。性格も、境遇も。ただ一つ、岡部にはタイムマシンの開発に成功するという奇跡が訪れて、パパには訪れなかったという違いはあったけれど。
でもまさか、こんなところまで似通ってしまうなんて。
私もまゆりも救おうと苦悩する岡部と、タイムマシン研究に情熱を注ぎ続けたパパ。二人には、〝望むものへの固執〟という共通点がある。
それが不可能であろうと、一度決めたら絶対に諦めない。そんな負の共通点。
私とまゆり、異なる世界線で分かたれた私たちの命を、両方救うことなんて不可能。
タイムマシンを完成させることも、奇跡が起きない限りは不可能。
それなのに二人は、客観的に物事を判断することも忘れて、自分が望むものだけに固執し続けている。
でも、その先にはなにもない。……きっと、どこにも行き着かない。現在のパパが、そうであるように。名誉も、人間関係も、すべてを失って、それでも諦めることができずにいる。あのパパの姿は、きっと、未来の

岡部の姿だ。

十六年先とは言わない。

二人とも救い出すという不可能に固執して、タイムリープをし続ければ……いずれ、そのときはやってくる。

もしそうなってしまったら、きっと岡部は、まゆりか私のどちらか一人だけにとどまらず、もっと多くのものを失うことになる。最悪、自身の命さえ。

――潮時、かな。

テープの中で、そう呟いた橋田教授には、もしかしたら見えていたのかもしれない。このままタイムマシン研究にのめりこみ続ければ、いずれは取り返しのつかないことになる、と。

恨み言を言うつもりはないけれど、あのとき橋田教授は、パパを止めるべきだった。先を見越せていたのなら、なおのことだ。

おそらく橋田教授は、パパのよき理解者であり、アドバイザーだった。

研究に没頭するパパに、助言を与える役回り。

そんな彼女だからこそ、ブレーキ役にもなれたはず。これ以上は無理だと言い聞かせ、なおも走り続けようとするパパを止めることが、彼女ならきっとできた。

……そして。

岡部のブレーキ役になれるのは、多分、私だ。

仲間を助けることを第一条件として、現実を受け入れようとしない岡部は、きっとこのまま暴走を続ける。その行き着く先には、なにもない。

岡部を止めないと――

ラジ館を飛び出した私は、岡部を捜して、何時間も秋葉原を彷徨った。

真っ先にラボに向かってみたけれど、そこに岡部の姿は見つからず。当然のように電話には出ない。まゆりや橋田に連絡してみたり、思いつく限りの場所に足を向けて。それでも岡部を見つけられなかった私は、もう一度ラボに足を向けてみることにした。

私が再びラボの前までやってきた頃には、日はすっかり暮れていて、街灯が街を照らし始めていた。雑居ビル二階にあるラボの窓を見上げてみると、室内に明かりはなく。やっぱり岡部の姿は見当たりそうになかった。

それでも念のため、私はラボの入り口まで行って、ドアノブを捻ってみる。

……開いた。

鍵は、かかっていなかった。

静かにドアを開けて、中の様子を窺ってみる。

ラボの中は真っ暗で、シンと静まり返っている。けれど、玄関には乱暴に脱ぎ捨てられた、大きな靴が転がっていた。

岡部が、いる。

私がそう確信したとき、カーテンの向こう側から、ギシ、と椅子の軋む音がした。

「…………」

靴を脱いで、カーテンの奥にある開発室に向かう。

カーテンに隠れるようにして開発室を覗いてみると──タイムリープマシンの前に、途方に暮れた様子で座る岡部の姿があった。

タイムリープマシンは起動しているらしく、点灯中のモニタが、暗闇の中にぼんやりと岡部の顔を照らしだしている。

その、まるで死人のような顔に、私は息を呑む。

──すでに、さらなるタイムリープを積み重ねた後なのだと、すぐに気付いた。

何十回、何百回、それとも何千回なのか。岡部、あんたはどれだけの時間を繰り返してきたの……？

だけど、何回繰り返したって、結果は変わらない。α世界線の因果は、まゆりの死に収束する。あんたの望むものなんて、絶対に手に入らない。

本当は、あんただって気付いてるんでしょ？　IBN5100を取り戻そうとしていたときとは違う。あんたが今していることは……。

「…………」

だらりと垂れ下がっていた岡部の腕がのそりと動いて、作業テーブルの上に置かれたヘッドギアを手に取る。

人間の記憶をデータ化するためのヘッドギア。タイムリープマシンを構成する重要パーツの一つ。岡部は、再びタイムリープをしようとしているのだ。

「逃げるの？」

これ以上、岡部にタイムリープをさせるわけにはいかない。

私は意を決して、開発室へと足を踏み入れた。

ヘッドギアを手にしたまま、岡部が驚いた顔を私に向ける。

「……紅莉栖」

「タイムリープするのは、逃げよ、岡部」

のろのろとした動作で、岡部が私から目を逸らし、手に持ったままのヘッドギアをじっと見つめる。浮き輪から空気が抜けていくような、長い吐息が聞こえた。

「これまでも……まゆりを助けるためっていう大義名分で……俺はたくさんの人を、傷つけてきたんだ」

あらゆる感情の消えた声で始まったのは、岡部の懺悔(ざんげ)だった。まるで教会で神に許しを乞(こ)うように、ポツリ、ポツリと言葉を紡(つむ)いでいく。

「しかも、そのことで感じる罪の意識も、だんだん鈍(にぶ)っていくんだ……。人としての、まともな感覚が失われていくんだ……」

気付いたら神みたいな立場にいたと、岡部は言った。

運命探知(リーディングシュタイナー)、Dメール、タイムリープ。

岡部が手に入れたのは、自分の思うがままに、世界を変え、やり直す権利。

その権利は最初、自覚もないまま無邪気(むじゃき)に振(ふ)るわれ、世界を様変わりさせた。そして世界を元に戻すべく動き出してからは、きっと、今そこに存在するものをいくつも否定しながら、岡部はここまでやってきた。

どれだけの想(おも)いを、どれだけの人の命を、岡部が踏(ふ)みにじってきたのかは分からない。けれど、そうして胸に刻み込んできたものも、繰り返される時間の中で、徐々(じょじょ)に薄(うす)れていく。

そして、一度引いてしまった引き金は軽くなる。一度犯(おか)した罪は、二度目には軽い気持ちで行われてしまうだろう。

……岡部の心が、壊(こわ)れようとしている。

「だったら、なんで今あんたは迷ってる？」

人の運命を弄(もてあそ)ぶことに、もはや罪悪感を感じないというのなら、私のことも見捨てればいい。β(ベータ)世界線に行って、その苦悩から解放されたらいい。

そうするべき。

それなのにどうして、こんなになってまで、あんたは……。

「……タイムリープマシンっていう保険がきかないから、かもな」

私の存在しないβ(ベータ)世界線に、タイムリープマシンは存在しない。α(アルファ)世界線にとどまる限りは、やり直すことが許される。だからあんたはここにいる。そうなんでしょ？　だったら、やっぱりあんたは、逃げてるだけよ。

「俺は、このマシンを使いこなしてなんてなくて……振り回されているだけなのかも……」

そう言おうとして、けれど、岡部が発した言葉に、私は口を噤(つぐ)む。

岡部も、気付いたのかもしれない。自分がただ、選択(せんたく)すべきを選択せず、逃げ続けているだけだということに。

「逃げたって、苦しくなるだけよ」

ただ現実を突(つ)きつけられて、絶望を深めるだけ。

「今の岡部、見てられない。自分の顔、鏡で見た？　急に老(ふ)けたみたい」

悩んで、悩んで、悩み続けて。どうにか私を助ける方法を考え続けて憔悴して。でもダメだった。そんな顔をしてる。

「そこまで思い悩まずに、私の言うことを素直に受け入れればいいんだ。……岡部。あんたはここにとどまっちゃいけない。まゆりと一緒に、β世界線に行きなさい。それがあんたのためでもあるし、私のためでもある」

「ぐっ……」

岡部の口から呻き声が漏れる。肩は震えて、呼吸も乱れがち。

泣くのを、必死で堪えてるんだろうと思う。

たくさんの人を傷つけたって、言ってた。誰を助けて、誰を犠牲にするかなんて、選びたくないって。手の届くところにいる人たちのことはみんな助けるって、傷つけた人たちに、岡部は誓っていたのかもしれない。

でも、もういい。こんなにボロボロになるまで、あんたは頑張ってくれた。

……岡部。

私はあんたのことを好きになれて、本当によかった。

私のためにこんなに必死になってくれた人は、他に誰もいなかった。仮にこの先生き続けることができたとしても、多分、岡部よりも素敵な人と巡り会うことなんて、できない。

私はもうすぐ消えなくちゃいけないけれど、私が欲(ほ)しかったものは、全部岡部がくれた。

人よりも短い人生なのかもしれないけれど、でも、他の誰にも負けないぐらい、私は幸せだったよ。

「俺は……お前を……助けられない。……済まない」

岡部の震える唇(くちびる)が、搾(しぼ)り出すようにして言葉を吐(は)き出した。

……そう。それでいい、岡部。あんたは未来に進みなさい。

「…………っ」

胸の奥が痛む。

ラジ館で垣間見(かいまみ)た死の記憶のように、鋭利(えいり)な刃物(はもの)が、私の心に突き刺(さ)さる。岡部に見放されたという絶望感が、傷口から心に沁(し)みこんでいく。

言わせたのは、私。

けれどその言葉が、ここまで痛いとは、思わなかったかな。

「なんでよりによって紅莉栖なんだって思う……くそっ」

この暗闇が、今は嬉(うれ)しい。

私の表情までは、岡部にはきっと見えない。

私の本心を、悟(さと)られずに済む。

……岡部は認めてくれた。岡部とまゆりは、きっともう大丈夫(だいじょうぶ)。だから、あと少しだけ頑張ろう。

「ねえ、岡部。私ね、ラボメンになれて、幸せだった」

胸の奥が熱い。

……泣くな。岡部の決意を揺(ゆ)るがせてはダメ。

「あんたたちと過ごしたこの二週間、本当に楽しかった。β(ベータ)世界線に行ったら、みんなは私のこと忘れちゃうんだろうけど……なかったことになっちゃうんだろうけど。でも、私は、岡部やまゆりと出会えて、本当によかったと思ってる」

送り出すんだ。

岡部とまゆりが、手と手を取り合って歩いていける、未来へ。

「俺は……お前のことを、絶対に忘れない！」

……そっか。そういえばあんたには、運命探知(リーディングシュタイナー)があるんだもの――

「誰よりも大切な女のことを……忘れたりするものか……！」

「えっ!?」

強烈(きょうれつ)な不意打ちだった。

込(こ)み上げていた感情が、衝撃(しょうげき)で心から溢(あふ)れかえりそうになる。

「な、なに馬鹿(ばか)なこと言ってんのよ……」

手が震えてる。ヤバイ。ビックリした。心の箍(たが)が外れそう。

「事実だ」
「そ、そそそれはええと、その……し、証明もなしに解を出すとか、本当あんたは、論理的じゃないんだか──」
「紅莉栖」
「ひゃいっ！」
「俺は──お前が好きだ」
「…………っ」
全身から力が抜けて、膝から崩れていきそうだった。
そんなこと、まったく想定してなかった。
岡部が、好き？　私のことを？
岡部の顔を直視できなくなって、私は顔をうつむかせる。感情は、もう心から溢れかえってしまっていた。
「お前は……？」
「えっ!?　と、言いますと!?」
「お前は、俺のこと、その……どう思ってる？」
心の奥に隠しておこうと思っていた想いが、もう、抑えられない。
──私も、岡部のことが大好き。

そう言いたくて、岡部の胸に抱（だ）きつきたくて……けれどその衝動を、私は寸前のところで、どうにかせき止める。

それを伝えてしまったら……私はもう、耐（た）えられない。

岡部を送り出すって決めた決意も、きっと揺らいでしまう。死にたくないって、岡部と別れたくないって……きっと岡部に縋（すが）りついてしまう。

その想いはきっと、岡部も、私も苦しめることになる。だから伝えられない。

……けれど。

「……し、知りたいのか？」

けれど、一度溢れかえってしまった感情を、もう一度心の奥底に抑え込むことなんて、今の私にはできない。

もう、心が折れてしまいそう。

だから、お願い。最後の勇気を、私にちょうだい。

「……目を閉じろ」

「なぜ、目を……？」

「いいから、閉じなさいよ！」

岡部は戸惑（とまど）いながらも、素直に目を閉じてくれた。

私は岡部の襟元を手に取って、岡部の顔を引き寄せる。間近に迫った岡部の顔をじっと見つめて、そして私は、岡部の唇に、そっと、自分の唇を重ねた。

「んっ……」

……私は、あんたの気持ちには応えない。なのに、こんなことをする私のワガママを、どうか許してほしい。

最後に一つだけ、思い出を残させて。

そしたら私、最後まできっと、頑張れるから――

3

八月十七日、七時二分、秋葉原駅前。

通勤客が行き交い、昼間の喧騒とは違う顔を覗かせる電気街を、私はスーツケースを引きながら歩いている。

最期を待たずに、私はアメリカに帰る。そう、決めたのだ。

「見送りは、ここまででいい」

駅前の広場で足を止める。

私の隣を歩いていた岡部は、二、三歩行き過ぎてから立ち止まって、物寂しそうにこちらを振り返った。

「本当に……行ってしまうのか？」
　未だ別れを惜しむ岡部に、私は努めて明るく、言葉を返す。
「辛気臭い顔しないの。らしくないぞ、鳳凰院凶真ともあろう男が」
「通勤客にまぎれて……というのが慌ただしいな」
「しょうがないよ」
「しょうがない……か」
　岡部は神妙な面持ちで、ジッと私のことを見つめている。私の姿をその二つの目にしっかり焼き付けようとしているように――その視線が、私から逸らされることは一瞬たりともなかった。
「な、なにジッと見てるのよ」
　岡部の顔を正視できなくて、たまらず私は視線を逸らす。
「俺は……お前が好きだ」
「……うん」
　なにかを求めるような岡部の視線。
　分かってる。岡部が求めてるのは、私の返事。
　昨夜、キスまでしたけれど、でも私は結局、自分の気持ちを伝えていない。
　もう会えないのなら、この想いを伝えても……。
「岡部、私は……」

言いかけて、口を噤む。……やめよう。もういい。

「……ううん、なんでもない」

岡部はこんなにも、私のために悩んでくれた。昨夜、キスもしてくれた。

私は十分幸せ。もう、ワガママは言わない。

ここで私が伝えた想いは、私にとって七年前のパパの言葉がそうであったように、呪縛（じゅばく）となって岡部を苦しめてしまうかもしれない。

そんなこと、私は望まない。

岡部、あんたは私のように、過去に囚（とら）われないで。前だけを向いて。まゆりと一緒に、未来に向かって歩いていってね。

だからどうか、私のことは……。

「岡部。まゆりを……お願いね」

「ああ、任せておけ」

「それじゃ……」

名残（なごり）惜しいけれど、そろそろお別れしないと。そうしないと、どんどん岡部との別れが辛（つら）くなってく。

「まゆりとダルは、本当に呼ばなくていいのか？」

「なんだか、みんなに見送られると辛くなるから。岡部だけなら、なんのためらいもなく日本を発（た）てる」

私の言葉を、どう捉えたのか。岡部は寂しそうに、唇を噛みしめている。……さっきの言葉に対する返事だと思ったのかな。

「ジョークよ」

私がクスリと笑うと、岡部は少しだけホッとした様子を見せた。

「手土産だ。持っていけ」

言って、岡部が白衣のポケットから取り出したのは、機械仕掛けの竹とんぼ。

「これ、未来ガジェット？」

「二号機の〝ダケコプカメラー〟だ」

竹とんぼの軸の先にCCDカメラが取り付けられている。なるほど、竹とんぼを飛ばして撮影すれば、誰でもお手軽に空中映像が撮影可能ってわけね。……ただし、竹とんぼが浮遊している間、その軸は高速回転しているわけだが、その辺はちゃんと考慮されてるんだろうな？　されてないんだろうな。

「いらねー……」

でもこれが、岡部なりの真心なのだろう。不器用な男なりの、私へのプレゼント。

「しょうがないから、受け取っておく」

プレゼントは、やっぱり嬉しい。大切にするね、岡部。

「…………」

鼻の奥がツンとする。なんだか、泣きたくなってきた。

やっぱり……岡部に見送ってもらったのは、失敗だったかもしれない。

別れが辛い。

ずっとあんたと話してたい。

最期のときまで、ずっと岡部と一緒（いっしょ）に……。

「青森（あおもり）、一緒に行けなかったな」

「うん……。でもこの二週間、なんだかんだで楽しかった」

……しっかりしろ、私。

ちゃんと岡部と、お別れしないと。

「まゆりや橋田によろしくね。……岡部、頑張（がんば）って」

手を振（ふ）って、ゆっくりと歩きだす。

「……元気で」

一瞬、私に追い縋るような動きを見せて、けれども岡部は、その場に踏（ふ）みとどまった。

……別れが辛いのは、岡部も一緒、か。

「俺は……！　牧瀬（まきせ）紅莉栖のことを、牧瀬紅莉栖の温（ぬく）もりを……絶対に、忘れない……！」



岡部の言葉を背に受けながら、私は駅の改札を通過した。

ありがとう、岡部。

この二週間、この秋葉原に私がいたことを覚えていてくれるのは、多分、運命探知(リーディングシュタイナー)を持つあんただけ。

……どうしてあんただけが、そんな能力を持っちゃったんだろう。

その能力さえなければ、今ここにいる私という存在は、世界からキレイに消えるのに。

私は、世界から否定された人間だから。ここに存在したらいけない人間だから。

だからお願い。どうか私のことは、忘れてほしい。私という存在を、この世界に残さないでほしい。

私は、世界から消えてしまいたい。そうすれば、パパのことも、あんたのことも、全部諦(あきら)めることができるのに……。

4

八月十七日、十二時……ええと、十二時……何分でも、いいか。

気付いたら、あれからもう五時間近く経(た)ってる。なのに私は、まだ秋葉原にいた。

秋葉原駅のホーム。その片隅(かたすみ)のベンチに、ぼんやりと座ってる。

耳に届いたのは、電車の到着を知らせるアナウンス。電車は、もう幾度となく私の前で停車と発車を繰り返している。乗降客は、のべ何人だったろうか。

聞こえてくるけど、見えているけど、情報としてはなに一つ、私の中に入ってこない。

……もう、私の心は止まってしまった。

岡部の背中を押して、別れを済ませて。それが最後の役目と決めていた私の心は、岡部と別れると同時に、オフになってしまった。もう、なんの気力もない。

もうすぐ私は消える。

たった十八年の私の人生。やるべきことは、やったと思う。未練がないと言ったら嘘になるだろうけれど、もう、今更なにをやっても、どこに行っても、意味なんてありはしない。

岡部は、まだ世界線を変えてないのね……。変えたら、私は消えてしまうはず。こうして、なにかを考えることもできなくなる。

ただの呼吸が、重いため息となって口から吐き出されていく。

まるで、死刑執行を待ってる気分。私はいつまで、こうしていればいいんだろう。

ねえ、岡部。早く、私を消して……。

「こんなところにいたんだ」

聞こえてきたのは、どこかで聞き覚えのある少女の声。そして視界に入ってきた細くてキレイな足が、私の目の前でピタリと歩みを止める。

……もしかして、私に話しかけてる？
まさかこんなところで誰かに声をかけられると思ってなかった私は、そう思い至るまでに数秒をかけ、テレビの海外中継のような時間差で、声の主の方へと顔を上げた。
「……フェイリスさん？」
そこに立っていたのは、あのネコ耳メイドの少女。ただし、髪型はツインテールのままだったけれど、今日はメイド服でもなければ、ネコ耳もついてない。一瞬誰だか判別がつかず、私は彼女の顔を見てから返事をするまでに、さらなる時間を必要とした。
「ひどい顔。ゾンビみたい」
「…………」
どうしてこんなところに……。
彼女とは、十五日の夕方にカセットテープを聞かせてもらって以来だ。
「隣、空いてるよね？」
フェイリスさんが私の隣に腰を下ろす。
「座っていいなんて、言ってない」
「駅のホームにあるベンチは、あなたのものじゃないよ。それに、猫は気まぐれなの」
あのとき私は、感情が昂るままに彼女にひどいことを言ってしまった。そのことを思い出して、少しバツが悪くなった私は視線を逸らす。

電車に乗ろうとしたところで偶然私を見かけて、文句でも言いに来たのだろうか。だとしても、悪いのは私。なにも言い返せることはない。

「なんでここに？」



「迷い猫を探してた」

……それは、私のことか？

「私は迷い猫じゃない」

「じゃあ、野良猫(のらねこ)」

「…………」

見透(みす)かされたようで面白(おもしろ)くなかったけれど、今の私を表すには的確な表現だった。

大切な場所を失って、行き場のない野良猫。

「……案外、ヒマなのね」

ため息混じりに言葉を返して、線路の方に視線を投げる。

「今頃(いまごろ)はもう、雲の上かと思ってたけど？」

「……キャンセル待ち」

「ここ、空港じゃなくて秋葉原駅だよ？」

……煩(わずら)わしい。最悪のタイミングで、一番厄介(やっかい)な相手に見つかってしまった。

「悪い？」

「あ、開き直った」

「……悪い？」



「……フェイリスさん。ううん、留未穂さん。私ね……私も、パパみたいに、伝えてない気持ちがあるの。言えなかった言葉が、あるの……」

　言いたかった。あいつの気持ちに、応(こた)えたかった。

　けれど、あいつもまゆりも、ずっとずっと苦しんでて……。

　二人を、助けたかったの。

　私に居場所を与(あた)えてくれたあいつに、幸せになってもらいたかったの。

　そのために私ができることは、一つしかなかった。あいつの背中を押すことしか、できなかった。

「それは、伝えちゃいけない言葉なんだって、思ってた。伝えないまま、心の中に閉じ込めて、消し去ろうとしてた。でも……」

「紅莉栖さん。忘れ去られた言葉はね、伝えられなかった言葉はね、それでも残しておけば、いつかきっと、誰(だれ)かが見つけてくれるはずだよ。パパが死んじゃった後、私が、このテープを見つけたように。七年前のお父さんの言葉を、今、あなたがこうして聞けたように。伝えたいって思っていれば、それはきっと、届くよ」

　私の手から、プレーヤーとヘッドホンを受け取って。そして留美穂さんは、優(やさ)しく笑った。

「だから、今から行っておいでよ。凶真のところ」

「……全部、お見通しなのね」

　涙を拭(ぬぐ)いながら、私は思わず笑ってしまった。

本当に、厄介(やっかい)な子なんだから。
「それこそが、フェイリスの魔眼(まがん)〝チェシャ猫の微笑(チェシャーブレイク)〟の能力なのニャ♪」
「フフ、はいはい」
彼女お得意の猫のポーズを、笑って受け流しながら、私はベンチから立ち上がった。
「……走れば、間に合うかな?」
「大丈夫(だいじょうぶ)。きっと」
うん、そうだね。
きっと、私の想いは、岡部に届く。今じゃなかったとしても。それは、いつか必ず――
「じゃあ、行ってくる」
「行ってらっしゃい。それで、またこの街に戻ってきてね。クリスティーニャン」
「私は、クリスティーニャンでも助手でもないんだからね!」
「うん」

笑いながら留未穂さんに手を振(ふ)って、そして私は、駆(か)け出した。

ねえ、岡部。
私は勘違(かんちが)いしてた。勘違いしたまま、ずっと自分の殻(から)の中で、自分を憐(あわ)れんでた。
でも、今さら、分かったの。

パパが、教えてくれたの。
私はここにいてもいいんだって。
私の大好きな人たちがいる。
大好きだって、言ってくれた人たちがいる。
岡部も、まゆりも、留未穂さんも、あとついでに、橋田も。
岡部、こんなの、全然論理的じゃないし、それこそファンタジー丸出しで、これまでの私なら、考えもしなかったけど。
ラボメンとして、この秋葉原で二週間を過ごしてきた今の私は、今の、私だから——
岡部を信じる。
岡部なら、きっと幸せな結末にしてくれるって。
私も消えなくて、まゆりも死なない、そんな世界にたどり着いてくれるって。
そのときまでのお別れをする前に、まだ伝えていない「さよなら」を言わなきゃ。
私の中にこの二週間で芽生えた、大切な気持ちを、伝えなきゃ。
私の〝現在〟が消えてしまっても。私が〝過去〟に残した言葉は、きっと〝未来〟へと、届くはずだから……。
そう、これは、未来へのタイムトラベル。

電話レンジでは、できなかったこと。
そして、誰もができること。

ラボの前まで走ってきたとき、私の耳に声が届いた。
見上げた先は、雑居ビル二階の窓。
窓は閉まっていたけれど、なんて言ってるのかは分からなかったけれど、そこから聞こえてきたのは、確かに岡部の声だった。
『────ッ！』
よかった、まだ時間はある。
私の想いを、岡部に伝える時間が。
息は上がりきっていたけれど、私は無我夢中で階段を駆け上がっていった。
雑居ビル二階、未来ガジェット研究所。
たどり着いたこの場所こそが、私の居場所。私の大好きな人たちが集う場所。
いつか──私が帰りつく場所。
「岡部……！」
ドアを開けて、ラボに飛び込む。
まゆりが、橋田が、驚いた表情で私を見ている。

そして岡部が――PCの前に座った岡部が、エンターキーを叩いた姿勢で、私を見ている。泣きそうな顔で、呆けた様子で……。

……なんて顔してんのよ。

しっかりしなさい、岡部。

あんたならきっと大丈夫。あんたが望む世界に、きっとたどり着くことができる。

そう、信じてるから。

だから、私の心を、あんたの中に残してく。

いつか、どこかの世界線の私を、見つけてもらうために……！

「さよなら。私も、岡部のことが――大好き！」

おわり



あとがき

このたびは、本書『STEINS;GATE　哀心迷図のバベル』をお買い上げいただき、まことにありがとうございます。

はじめまして。もしくは、またお会いできて光栄です。明時士栄と申します。『STEINS;GATE　変移空間のオクテット』全二巻に引き続き、本書の執筆をさせていただきました。

本書は、MAGES.（5pb.）様より発売されておりますゲームソフト『STEINS;GATE』の外伝的ストーリーを描いた「STEINS;GATE　ドラマCDα『哀心迷図のバベル』ダイバージェンス0.571046%」のノベライズとなっております。

ゲーム本編は岡部倫太郎の視点で物語が描かれておりますが、こちらのドラマCDは、ゲーム終盤の展開を牧瀬紅莉栖の視点で描いた物語。岡部が決断を迫られるその一方で、紅莉栖の身になにがあったのか。ゲーム本編では語られることのなかった物語をお楽しみいただければと思います。

さて、それでは最後に感謝の言葉で締めくく……りたいなぁと思っていたのですが、どうも友人がそれを許してくれそうにありません。「いいから書け」と。ですよね。
ということで、もうしばらくお付き合いください。
本書でドクター中鉢(なかばち)は、「過去に戻れたら」といった発言をしています。うん、そうですね……過去に戻れたらなぁと思うことは、私もよくあります。
まあ「過去に犯した失敗をなかったことにしたい！」ってほど深刻な理由ではありませんがね。幸いにも、実に平凡な人生を送ってきたので、自分の過去にさほど不満はありません。小さい不満はそりゃまあ山のようにありますが、その辺は言っても仕方ありませんしね。
そういう大きな理由はなくても、しかし「楽しかったあの頃に戻れたらなぁ」なんていう風に思うことはよくあるわけですよ。人生で一番楽しかったあの頃へ、もう一度！　というわけです。
人生で一番楽しかったのがいつなのかというのは、これは人それぞれだと思います。百人にアンケート取ったら、一番多い意見は高校時代とかになるんですかねぇ？　甘くもほろ苦い青春時代に戻りたいと考える人は、少なくない気がします。……高校時代ですか。私は、放送室のヌシになってましたかね。授業以外は常に放送室にいる感じの、妖怪みたいな高校生活を送っていた気がします。余談ですがその放送室には、現在声優として活躍している羽○野渉(はのわたる)さんが姿を現すこともあったりしました。
話を戻しまして、私の場合、人生で一番楽しかったのは大学生の頃でしたね。私は金沢(かなざわ)にある私立大学に通っていたんですが、大学での四年間は実に楽しい日々でした。

思い返してみれば、自分の人生の中で、あんなにフリーダムだった時間はなかったような気がします。なにをするも自由。勉学に励むも自由。労働に勤しむも自由。まあ学生なんだから学業が本分だろうとは言われるでしょうが、しかし「やろう」と思えば、大抵のことはできてしまうのが、大学生という身分です。

成人すれば、お酒だって飲めるようになります！……私は下戸（げこ）ですが。

まあ生憎（あいにく）、酒の素晴らしさは私にはまるで理解できませんでしたが、しかし運転免許を取得して行動範囲を広げることができたりと、やれることが段違いに増えますし。私も大学に通っている四年の間に様々な経験をしたものです。あの頃は、実に楽しく、充実した日々でした。

大学卒業後、社会人になってから気付いたんですが、大学生って、時間がたっぷりあるんですよね。大学生の頃は、社会人の方がお金もあるし、なんでもできるに違いない！　なんて夢みたいなこと思っていましたけど、そして確かに大学時代のバイト代よりはサラリーマンの給料の方が多かったですけど、でも社会人には時間がないんですよねぇ。むしろできることは、大学生の頃よりも少なくなったような気がします。

大学時代が楽しかったと思えるのは、愉快な友人たちに恵まれていたというのも、大きな理由かもしれません。彼らの中には、今でも付き合いのある人間が何人かはいるのですが……まあ、大学生の場合、卒業後はそれぞれの出身地に散ってしまうことが多いですからね。会うことも話すこともなくなった友人というのも少なくありません。もう一度大学時代に戻って、彼らと遊び回ったりしたいもんです。

……というようなことを、『STEINS;GATE』を遊んでいるとよく思います。やっぱり大学時代は楽しかったよなぁ、もう一度戻りたいよなぁ、と。……まあ、私の大学時代は、岡部と違ってまるで女っ気がありませんでしたがねっ！

それでは最後に、本書を出すに当たりご助力いただきました皆様に感謝を。

監修をしていただきました林直孝(はやしなおたか)様をはじめとするMAGES.の皆様。素晴らしいイラストをご提供くださいましたhuke様、成家慎一郎(なりいえしんいちろう)様と集英社ウルトラジャンプ編集部様。

再びの機会を下さいました富士見書房の皆様。様々なお力添えをいただきました冒険企画局の皆様。特にお世話になりました大高直樹(おおたかなおき)様。そして本書を手に取ってくださった皆様に。本当にありがとうございました。

新作ゲーム「線形拘束のフェノグラム」の発売、劇場版アニメ「負荷領域のデジャヴ」の公開と続く『STEINS;GATE』が、今後ますます盛り上がっていくことを願いつつ、この辺りでお別れとさせていただきたいと思います。

それではまた、どこかの世界線で。

STEINS;GATE—シュタインズ・ゲート—

哀心迷図のバベル

原作：5pb.×ニトロプラス

著：明時士栄

平成25年4月25日　発行
発行者　山下直久
発行所　株式会社富士見書房
〒102-8144　東京都千代田区富士見1-12-14
http://www.fujimishobo.co.jp/